

並木遺跡

—安中市消防署庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010

群馬県安中市教育委員会

並木遺跡

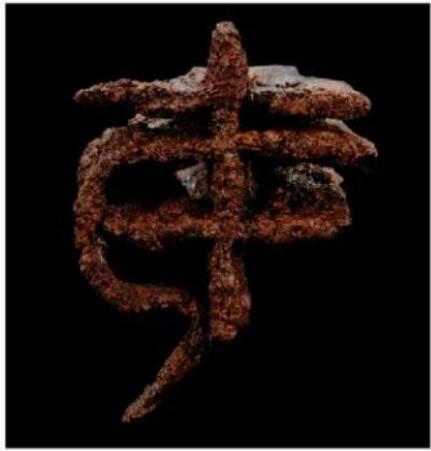
—安中市消防署庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010

群馬県安中市教育委員会



並木遺跡から妙義山を望む



H-7号住居址出土 焼印

序

群馬県の西部に位置する安中市は、平成 18 年 3 月に松井田町と合併し新しい安中市となりました。両市町は「碓氷郡」に属していた経緯があり、古代より密接な関係にあります。なかでも長野県境にある碓氷峠を介して東山道、中山道と言った歴史的な街道、近代に至ってはアプト式鉄道の開設と信越本線の開通、そして新幹線といった交通の要衝として栄えてまいりました。

今回発掘調査を行った『並木遺跡』は、安中市の安中地区にあります。安中地区は近世安中藩の安中城を中心に旧中山道の宿場町が置かれ、街道筋には杉並木が整備され、今もその面影を残した交通の要衝として栄えて来た地区です。また『並木遺跡』のある一帯は上野尻と呼ばれ、この地名は古代碓氷郡の「野尻郷」あるいは古代東山道駅跡に設置された「野尻駅家」に由来する地名として知られています。

『並木遺跡』は安中消防署の庁舎建設事業に伴い、平成 20 年度に発掘調査を、平成 21 年度に整理・報告書作成を行ったものです。調査によって古代の集落址や近世の遺構が発見されました。また平安時代の住居址から、鉄製の焼印が出土しました。印文は「東」で、一部欠けてしまっていましたが全体的にとても残りの良い状態で、古代碓氷郡、古代東山道との深い関係が注目されます。

このような発掘調査成果をまとめた本報告が、学術分野に寄与するだけではなく、地域を学ぶ郷土資料として活用されることを願ってやみません。

最後に、調査にご協力いただいた高崎市等広域市町村圏振興整備組合、高崎市等広域消防局、安中消防署及び発掘調査に従事していただいた方々、また各関係機関の皆様には感謝申し上げます。

平成 22 年 3 月

安中市教育委員会

教育長 中澤 四郎

例　言

- 1 本書は安中市消防署庁舎建設に伴う並木遺跡（遺跡略称D－24）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 並木遺跡は、安中市安中一丁目字並木地内に所在する。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至るまでの一連の作業は、高崎市等広域市町村圏振興整備組合の費用負担によって行われた。
- 4 確認調査は、安中市教育委員会文化振興課文化財係主査 千田茂雄が担当した。発掘調査及び整理作業は、安中市教育委員会の指導のもと、有限会社毛野考古学研究所 有山径世が実施した。
- 5 確認調査は平成20年9月1日より9月5日まで実施した。発掘調査は平成20年10月3日より平成20年12月2日まで、整理作業は調査終了後より平成22年3月31日までの間、断続的に実施した。
- 6 本書の編集は有山が行った。執筆はIを千田が、他を有山が担当した。
- 7 発掘調査における資料、出土遺物は一括して安中市教育委員会で保管している。
- 8 発掘調査および本書の作成にあたり、以下の方々に各種ご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）
株式会社スカイサーベイ 株式会社大成測量 スナガ環境測設株式会社 安中土建
高島英之 笹澤泰史 外山政子 三浦京子
- 9 発掘調査・整理作業に従事した者は以下のとおりである。（順不同・敬称略）
発掘調査：生駒朝男 岩井英雄 宇佐美璋一 須藤利男 須藤はるの 多胡わぐり 萩原今朝治
萩原治江 黒 清美
整理調査：鬼形敦子 廣上良枝 大塚規子 濑尾則子 小野澤絹子 池内麻美 伴場りく
一場友香里 松村由記 有田麻紋
- 10 調査組織
平成20年度 平成21年度
教育委員会事務局 教育委員会事務局

教　育　長	中澤四郎	教　育　長	中澤四郎
教　育　部　長	佐藤伸太郎	教　育　部　長	佐藤伸太郎
学　習　の　森　所　長	小島成公	学　習　の　森　所　長	小島成公
文　化　財　係　長	藤巻正勝	文　化　財　係　長	藤巻正勝
主　　査	壁　伸明	主　　査	壁　伸明
主　　査	蜂須賀まゆみ	主　　査	蜂須賀まゆみ
主　　査	千田茂雄（調査担当）	主　　査	千田茂雄（調査担当）
主　　査	深町　真	主　　査	深町　真
主　　査	新井雅彦	主　　任	井上慎也
主　　任	井上慎也	主　事　補	小此木克之

凡 例

- 1 遺構の実測図は1/80を基本とし、全体図は1/300とした。
- 2 遺構図中の北マークは磁北である。
- 3 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

縄文土器：1/3	土師器・須恵器・灰釉陶器：1/4
縄文石器：1/3	石製品：1/2 鉄製品：1/2
- 4 遺物実測図のスクリーントーンは灰釉陶器の釉薬、実測図左下の●は須恵器を示す。
- 5 土層説明中の記号、略称は次のとおりである。

色調<：より明るい方向を示す（例 嚙<明）
しまり、粘性 ◎：あり ○：ややあり △：あまりない ×：なし
混入物の量 ◎：大量（30～50%） ○：多量（15～20%） △：少量（5～10%）
※：若干（1～3%）
混 入 物 R P：ローム粒子（溶け込んだ状態） R B：ロームブロック（固まりの状態）
Y P（A s-Y P）：板鼻黄色軽石 B（A s-B）：浅間B軽石
A（A s-A）：浅間A軽石
- 6 ピットの深さは、以下のスクリーントーンで示す。

○ 0～19 cm	○ 20～39 cm	○ 40～59 cm	○ 60 cm以上
-----------	------------	------------	-----------
- 7 遺物重量分布マーク

	10 g	100 g	1000 g	1個	5個	10個
土師器甕系	●	●	●	●	●	+
土師器壺系	■	■	■	■	■	田
須恵器甕系	○	○	○	○	○	◎
須恵器壺系	□	□	□	□	×	×
灰釉陶器	▲	▲	▲	▲	▲	×
- 8 遺物観察表に示した計測値の（ ）は復元推定値を、< >は残存値を表す。
- 9 遺構土層および土器の色調観察は『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所監修 2006）に従った。
- 10 遺物番号は、実測図・観察表・写真図版とともに共通である。
- 11 本書掲載の第1図は安中市発行1/2,500「安中市都市計画基本図」、第2図は国土交通省国土地理院発行1/25,000「松井田」「富岡」「三ノ倉」「下室田」を使用した。

目 次

口絵

序

例言

凡例

目次

I 調査に至る経緯	1
II 調査の方法と経過	2
III 遺跡の地理的・歴史的環境	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
IV 層序	5
V 遺構と遺物	5
1 遺跡の概要	5
2 繩文時代の遺物	7
3 古墳～奈良・平安時代の遺構と遺物	7
4 近世の遺構	28
VI 成果と問題点	38
1 奈良・平安時代の土器群の変遷について	38
2 H-7号住居址出土の焼印について	40

写真図版

発掘調査報告書抄録

挿図目次

第1図 調査区設定図	1
第2図 並木遺跡と周辺遺跡分布図	4
第3図 基本層序柱状図	5
第4図 並木遺跡全図	6
第5図 繩文時代の遺物実測図	7
第6図 H-1号住居址実測図	11
第7図 H-2号住居址実測図	12
第8図 H-3号住居址実測図	13
第9図 H-4・5号住居址実測図	14
第10図 H-5号住居址実測図	15
第11図 H-6号住居址実測図(1)	16
第12図 H-6号住居址実測図(2)	17
第13図 H-7号住居址実測図	18
第14図 M-11号溝, D-1~5号土坑実測図	19
第15図 H-1号住居址 遺物実測図	21
第16図 H-2号住居址 遺物実測図	22
第17図 H-3号住居址 遺物実測図	23
第18図 H-4・5号住居址 遺物実測図	24
第19図 H-6号住居址 遺物実測図	25
第20図 H-7号住居址, D-5号土坑, 道構外 遺物実測図	26
第21図 H-7号住居址 遺物実測図	27
第22図 M-1~3号溝実測図	28
第23図 M-4~7号溝実測図	29
第24図 M-8~10・12・13号溝実測図	30
第25図 P1~47号ビット実測図	31
第26図 奈良・平安時代の土器群	39

表目次

第1表 道路一覧表	4
第2表 道構観察表	32
第3表 土器観察表(1)	33
第4表 土器観察表(2)	34
第5表 土器観察表(3)	35
第6表 土器観察表(4)	36
第7表 土器観察表(5)	37
第8表 石器・石製品・鉄製品観察表	37

図版目次

図版1 東山道駅路関係学術調査時における 並木遺跡周辺	
並木遺跡 全景	
図版2 H-1号住居址	
H-1号住居址 築	
H-1号住居址 遺物出土状態	
H-1号住居址 貯蔵穴遺物出土状態	
H-2号住居址	
H-2号住居址 遺物出土状態近景	
H-2号住居址 築	
H-2号住居址 築遺物出土状態	
図版3 H-3号住居址	
H-3号住居址 遺物出土状態近景	
H-3号住居址 築	
H-3号住居址 築遺物出土状態	
H-3号住居址 薦袖内遺物出土状態	
H-4号住居址	
H-5号住居址	
H-5号住居址 遺物出土状態近景	
図版4 H-6号住居址	
H-6号住居址 築	
H-6号住居址 遺物出土状態	
H-6号住居址 築り方	
H-6号住居址 築り方	
H-6号住居址 D-3断面	
図版5 H-7号住居址	
H-7号住居址 築	
H-7号住居址 梶印出土状態	
H-7号住居址 築り方	
D-1号土坑	
D-2号土坑	
D-3号土坑	
D-4号土坑	
D-5号土坑	
図版6 P1~47号ビット	
P1~47号ビット	
M-1号溝	
M-2号溝	
M-3号溝	
M-4号溝 断面	
M-5号溝	
M-6号溝	

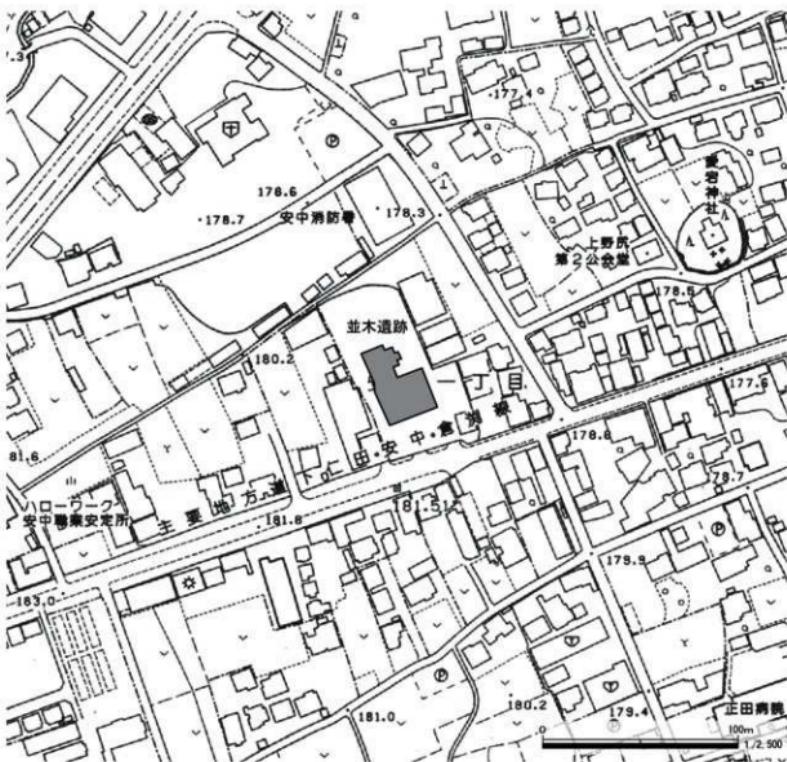
I 調査に至る経緯

平成 20 年 8 月、高崎市等広域消防局から安中消防署と建設事業の実施に伴う埋蔵文化財の照会があった。

事業計画地内は一部、周知の埋蔵文化財包蔵地内にあり、また古代東山道推定路線に近いこともあり遺跡が存在する可能性が高い地域である。そのため、事業実施に先立ち埋蔵文化財の取り扱いについて事前協議を実施する必要がある旨を高崎市等広域消防局へ伝えた。

その後、高崎市等広域消防局と市教育委員会の間で文化財保護のための協議を行った。協議に於いては、文化財保護のための計画変更をも含め再三にわたり行われた。

しかし、計画変更を行っても埋蔵文化財への影響は避けられないことから、当初の計画どおり事業を実施することとなった。



第 1 図 調査区設定図

II 調査の方法と経過

調査範囲は、平成 20 年 9 月 1 日から 9 月 5 日まで実施した確認調査の成果をもとに設定した。グリッドは調査区全域をカバーするように $4\text{ m} \times 4\text{ m}$ で設定し、北から南へ A・B・C …、西から東へ 1・2・3 … と表し、北西角をグリッドの呼称とした。さらに $2\text{ m} \times 2\text{ m}$ に 4 分割した小グリッドを設定し、北西、北東、南西、南東の順に a、b、c、d と呼称することとした。なお、グリッドの位置については、調査区北西角を基準としたため、国家座標（日本測地系IX系）への取り付けは行っていない。

発掘調査は、平成 20 年 10 月 3 日より開始し、同年 12 月 2 日までの間実施した。重機によって遺構確認面まで掘削した後、ジョレンを用いて人力による遺構検出作業を行った。その結果、住居址 7 軒、溝 13 条、土坑 5 基、ピット 60 基が検出された。遺構の掘り下げに際し、住居址については、土層観察用のセクションラインを基準として、住居内を 16 区に分割した。遺物の取り上げは、分層して各層位ごとに取り上げる「16 分割分層方式」にて行った。その他の遺構については、範囲を確認後、溝は適宜セクションベルトを設定、土坑・ピットは半截し、土層を記録した後に完掘した。遺構外については、小グリッドで層位ごとに取り上げた。

図面・写真による記録は、土層断面・遺物出土状態・完掘状態・掘り方等の各段階において行った。遺構図は縮尺 $1/40$ を基本とし、カマド等の微細図は $1/10$ 、全体図は $1/100$ で作図した。平面図については航空写真を利用し、断面図・微細図については手実測で測量した。写真撮影では、カメラはニコン F 3-35 mm版を、フィルムはカラーリバーサルと白黒ネガを使用した。作業進捗状況等の記録用には、デジタルカメラを適宜用いた。航空写真はラジコンヘリコプターを用いて撮影した。

整理作業は、発掘調査終了後、平成 22 年 3 月 31 日までの間断続的に実施した。遺物の洗浄・注記 → 分類・接合・復元→写真撮影→実測・トレース・遺物観察表作成→図版作成の順で行った。遺物の注記は、ポスターカラーを用い手作業で行った。接合にはセメダイン C を、復元にはエボキシ樹脂を使用した。遺物実測は原寸で行い、縄文土器・須恵器の破片については拓本を用いた。遺物写真撮影には、デジタルカメラ（ニコンデジタル一眼レフ D 200）を使用した。また、並行して遺構図面の修正・写真整理および図版作成を行った。

なお、遺構・遺物の実測図トレースには Adobe IllustratorCS2、遺物写真の加工には Photoshop6.0、報告書の図版作成・編集作業には Adobe InDesignCS2 を用いた。

III 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部に位置している。市域は、碓氷峠付近を水源として北西から南東方向へ流下する碓氷川により南北に分断される。碓氷川の北側には九十九川が並行して流れ、市東部で碓氷川と合流する。これらの河川流域には、河川低地や河岸段丘が発達している。河岸段丘は下位段丘面（磯辺地区・人見地区）、中位段丘面（原市・安中台地）、上位段丘面（横野台地）から成る。また、市北部および南東部等には丘陵（秋間丘陵・岩野谷丘陵・松井田丘陵）が広く分布している。

並木遺跡は安中市安中一丁目字並木に所在する。碓氷川と九十九川に挟まれた碓氷川中位段丘面（安中台地）の最高位に位置し、やや北へ傾斜した平坦地に立地する。標高は約 180 m である。

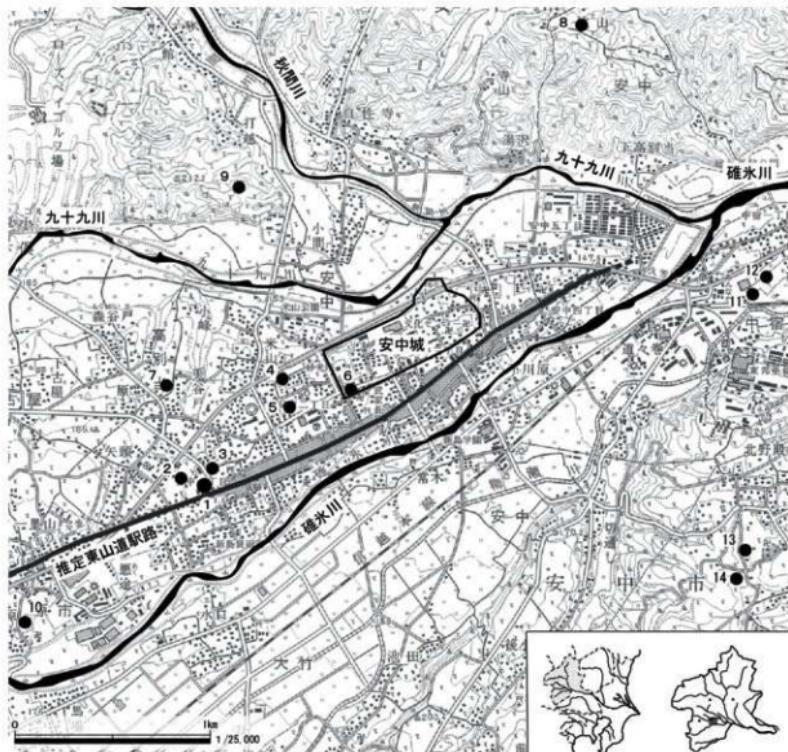
2 歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、本遺跡の所在する安中台地では確認されず、碓氷川流域の上位段丘（横野台地）を中心に検出されている。縄文時代・弥生時代においても横野台地が拠点的な地域となり、本遺跡周辺は遺構の密度が薄い。縄文時代は土井遺跡、植松・地尻遺跡、地尻・地尻 II 遺跡で中期の土坑が検出された程度である。弥生時代は植松・地尻遺跡で中期後半の住居址が検出されている。

古墳時代は、多くの古墳が築造される。本遺跡周辺にも多数分布し、7世紀代の円墳である悪途東K-1号墳、めおと塚古墳等が見られる。集落址は、植松・地尻遺跡で多数の住居址が確認されているものの、安中台地を見渡すと遺跡数は少なく、規模も小さい。

奈良・平安時代において、本遺跡一帯は古代碓氷郡を考える上で重要な地域の一つである。古代碓氷郡の「野後郷」に比定されており、郡家が存在した可能性も指摘されている。さらに、東山道駿路が通過し、「野後駅」が置かれていたと推定されている。このように、碓氷郡の中でも中心的な地域と考えられ、こうした性格を示すと推測される遺跡が確認されている。植松・地尻遺跡では区画施設を持つ大型掘立柱建物群が検出され、公的な建物跡と推測されている。遺物も「評」と刻書された7世紀代の須恵器蓋や、金銅製の巡方・装飾品の一部（ドングリ形）、布目瓦等の特殊遺物が出土している。地尻遺跡・地尻 II 遺跡では古墳時代末～奈良時代初頭の住居址が検出され、畿内の土器を真似た暗文土器や須恵器の円面碗等が出土している。高別当地区や桃山地区からは、瓦塔の破片が採取されている。東山道駿路は、当初その痕跡を留めた地条帶として、本遺跡と土井遺跡の間を東西方向に通る道路部分が推定されていた。市史編纂事業により学術調査が実施されたが（上野尻遺跡）、古代の遺物（須恵器・瓦等）は出土したものの、駿路の存在を明らかにするには至らなかった。なお、当該期の集落址は、地尻 III 遺跡、土井遺跡、西殿遺跡、堀谷戸遺跡等で確認されている。生産址は、九十九川流域一帯で浅間B軽石に覆われた水田址が広範囲に確認されている。

中世は、上野尻遺跡で大溝が検出された。北東に位置する地尻遺跡・地尻 II 遺跡で居館址を巡る堀が発見されていることから、これに水を張るために用水路である可能性が高いと考えられている。近世は、永禄2年安中忠政の築城とされる安中城が存在する。



第2図 並木遺跡と周辺遺跡分布図

遺跡名	旧	縄文				弥生				古墳				奈良	平安	中世	近世	備考
		草	早	前	中	後	晩	中	後	前	中	後	終					
1 並木															○	△	△	本報告 古代集落址
2 上井															○			中世譲
3 上野尻															○	○	○	古代公の施設
4 緑松・地尻		*													○	○	○	古代集落址
5 地尻Ⅲ															○	○	○	古代集落址、中世譲
6 地尻・地尻Ⅱ															○	○	△	△
7 高別当瓦塚出土地																*	*	
8 桃山瓦塔出土地																		
9 めおと塚古墳																		
10 慶應東K-1号墳																		
11 中宿在家																		
12 中宿在家Ⅱ																		
13 西殿																		
14 堀谷戸			*	*	*	*									○	○	○	△

◎: 大規模な遺跡（集落址・古墳等）

○: 中規模な遺跡（住居址・牧闌遺跡等）

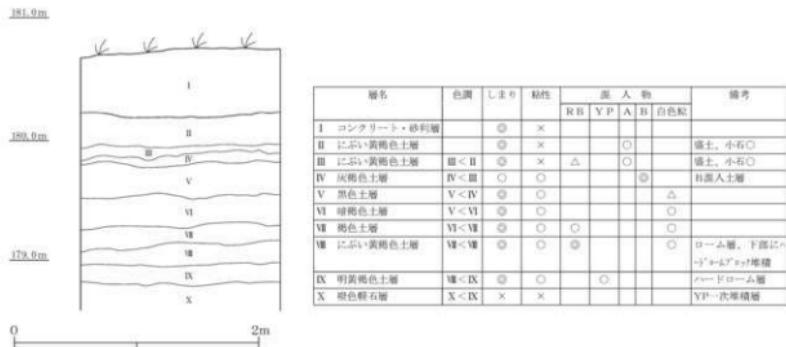
△: 小規模な遺跡（土坑・溝等）

*: 遺物が出土した遺跡

第1表 遺跡一覧表

IV 層序

本遺跡の基本層序は第3図のとおりである。指標となるテフラは、現地表面から約194 cm下（X層）で浅間一板鼻黄色軽石（As-YP；1.3万年前）層が確認されている。浅間B軽石（As-B；1108年降下）層および浅間A軽石（As-A；1783年降下）層は、後世の擾乱を受けており、一次堆積層は残存していないかった。V層は古墳～奈良・平安時代の遺物包含層であり、遺構確認はVI層上面で行った。



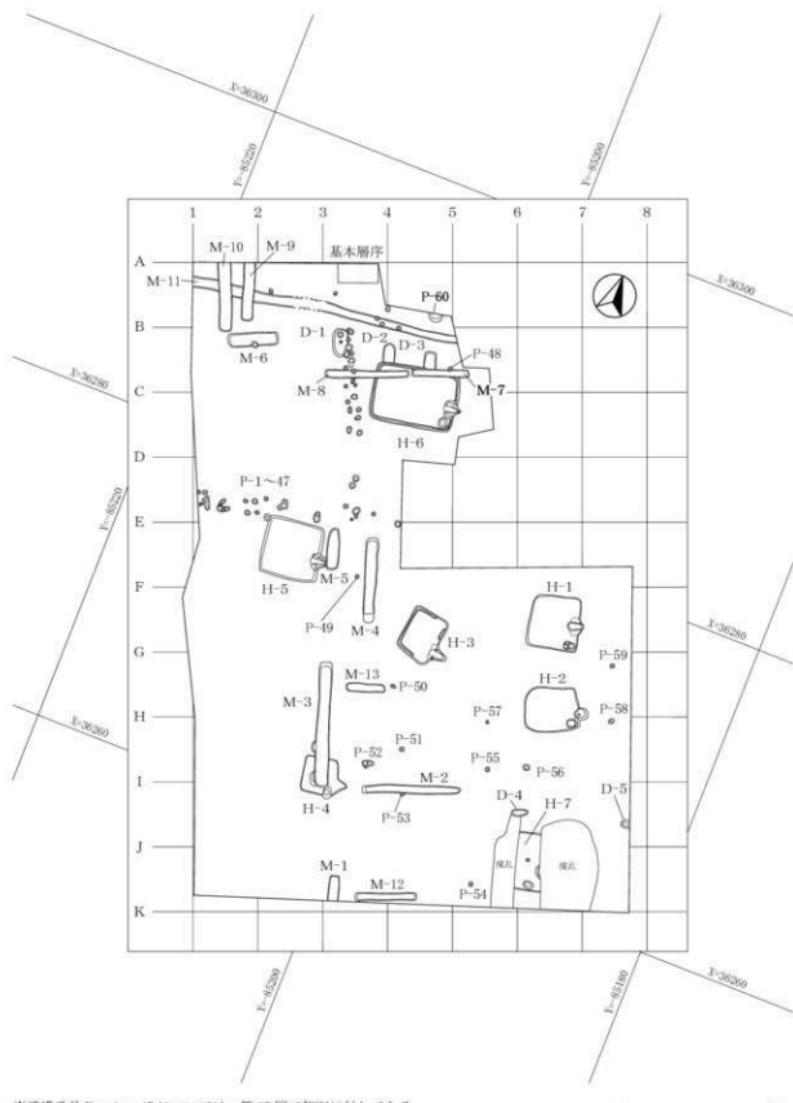
第3図 基本層序柱状図

V 遺構と遺物

1 遺構の概要

本遺跡で検出された遺構は、古墳～奈良・平安時代と近世に大別される。古墳～奈良・平安時代に比定されるのは、住居址7軒、溝1条、土坑5基、ピット8基である。住居址は、奈良時代が2軒（H-5・6号住居址）、平安時代が5軒（H-1～4・7号住居址）である。規模は小～中形で、主柱穴を持たず、竈は東壁に付設されている。竈構築材については、奈良時代がローム混合土を主体とするのに対し、平安時代は自然礫を多用している。床面も奈良時代は貼床だが、平安時代は直床と差異がある。なお、H-7号住居址は住居中央に小ピットを有し、周辺の硬化面上に焼土・炭化物が散っていることなど、他の住居址とは異なる特徴が認められた。近世に比定されるのは、溝12条、ピット52基である。溝は浅間A軽石の復旧溝である。ピットは、不規則だが2基ずつ逆「L」字状に並ぶピット群（P-1～38号ピット）が検出されている。

出土遺物については、縄文時代は中期初頭～前葉の深鉢、打製石斧等の石器、古墳～奈良・平安時代は土師器、須恵器、灰釉陶器、砥石、編物石、鉄製品、椀形鉄滓、近世は陶磁器碗、在地系土器鍋等が確認されている。特筆すべき遺物として、H-7号住居址から出土した鉄製の焼印が挙げられる。



*遺構番号 P-1 ~ 47 については、第 25 図で個別に付してある。

0 10m

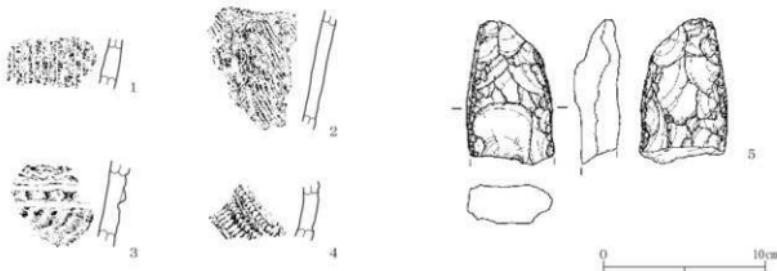
第 4 図 並木遺跡全体図

2 縄文時代の遺物（第5図）

遺構の存在は確認できなかったが、表土、遺物包含層（V層）、住居址（H-5・6号住居址）から、縄文土器および石器が少量出土した。

縄文土器は全て深鉢の小片で、時期は中期に限定される。1・2は中期初頭の五領ヶ台式に比定される。1は半截竹管状工具による縦位の沈線文、2は単節R L縄文が施される。3・4は中期前葉に帰属する。3は阿玉台I式に比定され、横位波状沈線文および指頭押圧のある横位隆帯が施文される。下位には、当型式に特徴的なひれ状圧痕が見られる。4は勝坂I式に比定され、連続押引文と三角押文が施文されている。

石器は、製品となるのは5の打製石斧1点のみである。頁岩の剥片を素材としたもので、側縁部には摩耗痕が認められる。製品以外では、H-5号住居址12区4層およびC-2グリッドから安山岩・頁岩の剥片が出土している。



第5図 縄文時代の遺物実測図

3 古墳～奈良・平安時代の遺構と遺物

（1）遺構

1. 住居址

時期

奈良時代：H-5・6号住居址

平安時代：H-1・2・3・4・7号住居址

奈良時代の住居址

H-5号住居址（第9・10図） M-5号溝およびP-11号ピットと重複し、本住居址が古い。平面正方形である。床は全体的に綺まり、竈前方には硬化面が認められる。貼床で、ロームブロック・にぶ

い橙色粘質土を含む黒色土が埋め戻されており、深さは4～10cmである。壁溝・主柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。竈は東壁の中央よりやや南側に付設される。全長115cm、燃焼部幅32cmである。奥壁は良く焼けて赤色化している。焚口から燃焼部にかけて灰が薄く堆積していた。袖はロームと黒色土の混合土で構築されている。袖の先端内側には黒色土が円形状（長径13～14cm）に検出され、芯材の痕跡と考えられる。燃焼部からは、土師器甕（第18図13）の破片がまとまって出土している。

遺物は、土師器の壺・甕、須恵器の壺・高台付壺・高杯・甕が出土した。床面上から、竈の右脇で土師器壺（第18図10）・須恵器高台付壺（第18図11）、6区で土師器甕（第18図12）が出土している。また、2区2層から正位で出土した土師器壺（第18図8）は、内底面に「×」の線刻が認められる。土器以外では、編物石が床面付近から出土した。位置は住居の北東側に偏る。

H-6号住居址（第11・12図） M-7・8号溝およびD-2・3号土坑と重複する。本住居址はD-1・2・3号土坑より新しく、M-7・8号溝より古い。平面長方形である。床は全体的に良く綺まり、竈前方から貯蔵穴（D-1）にかけて硬化面が認められる。貼床で、ロームブロック・YPを含む黒褐色土が埋め戻されている。深さは2～8cmで、竈付近では浅くなる。壁溝は各壁下で検出された。竈袖下まで廻っており、壁溝掘削後に竈を付設したことが分かる。主柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は竈右脇に位置する。竈は東壁の中央よりやや南寄りに付設される。全長101cm、燃焼部幅33cmである。奥壁は良く焼けて赤色化している。燃焼部には焼土がごく薄く堆積し、中央やや北寄りに支脚痕が認められる。袖はロームと灰褐色粘質土の混合土で構築され、焼土・炭化物が多量に混入している。袖下からは、ピットが3本検出され（P-1～3）、袖と同じ土が充填されていた。P-1・2は袖の先端に位置することから、芯材の痕跡と推測される。床下土坑は住居中央で2基（D-3・4）確認され、YPを主体とする土が充填されていた。D-4は南側に半円状の張り出しがあり、粘質土が貼り付けられていた。遺物はD-4の上層から須恵器壺片が1点出土したのみである。土坑・ピットの規模は、D-1が長径64cm、短径52cm、深さ40cm、D-2が長径51cm、短径42cm、深さ24cm、D-3が長径125cm、短径125cm、深さ94cm、D-4が長径146cm、短径124cm、深さ91cm、P-1が長径25cm、短径24cm、深さ13cm、P-2が長径20cm、短径20cm、深さ16cm、P-3が長径19cm、短径18cm、深さ15cmである。

遺物は、土師器の壺・盤・鉢・甕、須恵器の壺・蓋・高台付壺・甕が出土した。床面上から、竈周辺で土師器盤（第19図2）・鉢（第19図3）・甕（第19図8）が出土している。土器以外では、砥石および編物石があり、位置は住居北東角の下層から床面上に集中している。

平安時代の住居址

H-1号住居址（第6図） 北側を現代の擁乱に壊される。平面正方形である。床は竈前方から貯蔵穴（D-1）にかけて硬化面が認められる。掘り方はなく、VI層を直接床面としているが、貯蔵穴と竈の間には浅い掘り込みがあり、焼土・炭化物・ローム粒を多量に含む黒褐色土が充填されていた。壁溝・主柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は竈右脇に位置し、東西に2つ隣接して掘り込まれている。規模は、D-1東が長径44cm、短径44cm、深さ24cm、D-1西が長径36cm、短径30cm、深さ21cmである。東側の底面から須恵器壺2点（第15図8・9）、西側の上面から須恵器壺（第15図2）がそれぞれ伏せられた状態で出土した。第15図8は墨書き土器で、文字は「秋」と判読される。竈は東壁のほぼ中央

に付設される。全長 103 cm、燃焼部幅 53 cm である。燃焼部にはわずかな灰の痕跡が認められる。竈から竈前方の 2・3 区にかけて、自然石（長さ 20～30 cm 台が主体）が 20 点出土した。石材は安山岩と凝灰岩で、安山岩が多い。熱を受けて変色しているものが大半を占め、竈構築材として使用されていたものと判断される。

遺物は、土師器の甕、須恵器の坏・蓋・高台付碗・甕・羽釜が出土した。竈周辺に集中し、床面直上からは、4・5 区で須恵器坏（第 15 図 6・7）が出土している。土器以外では、10 区床面直上および 11 区 1 層から鉄製品の細片（器種不明）、16 区 2 層および竈から編物石が出土している。

H-2号住居址（第 7 図） 北側を現代の搅乱に囲まれる。平面長方形である。床は竈前方から貯蔵穴（D-1）にかけて硬化面が認められる。掘り方はなく、VI 層を直接床面としている。壁溝・主柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は竈右脇に位置する。規模は、長径 60 cm、短径 52 cm、深さ 14 cm である。竈は東壁の中央よりやや南側に付設される。全長 86 cm、最大幅 55 cm である。燃焼部にはわずかな灰の痕跡が見られ、支脚痕と考えられるビットが検出された。竈から住居南側にかけて自然石（長さ 10～30 cm 台が主体）が 7 点出土した。石材は安山岩と凝灰岩で、安山岩が多い。熱を受けて赤化したものが大半を占め、竈構築材と判断される。

遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏・蓋・高台付碗・高台付皿・甕・瓢・羽釜、灰釉陶器の碗が出土した。竈右脇の 4 区 1 層からは須恵器高台付碗が 2 枚重なった状態（上：第 16 図 6、下：第 16 図 5）で出土している。竈出土の須恵器高台付皿（第 16 図 7）は、底部内面に墨書きが施されている。土器以外では、3 区床面付近から鉄製品（第 16 図 16）、1・3 区から編物石が出土している。

H-3号住居址（第 8 図） 平面長方形である。床は竈前に硬化面が認められる。VI 層を直接床面としているが、硬化面部分のみ貼床で、ロームブロックを含む褐色土が薄く充填されている。深さは 2～6 cm である。壁溝は、西壁下および北・南壁下の西半分、東壁下の一部で検出された。貯蔵穴は検出されなかった。竈は東壁の中央より南側に付設される。全長 110 cm、燃焼部幅 34 cm である。燃焼部の上層から安山岩が 1 点出土した（長さ 30 cm）。片面が熱を受けて変色している。袖は黒色土混合のロームを主体として構築される。袖下には浅い窪み（長径 12～14 cm）が検出された。底面が縮まっており、芯材として石を設置した痕跡と推測される。また、右袖内には、須恵器高台付碗・瓢の破片が埋め込まれていた（第 17 図 4・7・10）。

遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏・蓋・高台付碗・甕・瓢が出土した。床面直上からは、3 区で須恵器高台付碗（第 17 図 2）、14 区で須恵器高台付碗（第 17 図 6）、竈右脇の 4 区で須恵器大甕（第 17 図 11）の破片が出土している。竈内からは須恵器高台付碗（第 17 図 3・5）が出土している。土器以外では、8 区の床面直上から鉄製錠（第 17 図 12）が出土している。

H-4号住居址（第 9 図） M-3 号溝と重複し、本住居址が古い。平面正方形である。床は VI 層を直接床面としており、硬化面は認められなかった。竈は東壁の中央より南側に付設されるが、焼土の堆積はわずかで不明瞭である。土坑が 2 基（D-1・2）検出された。規模は、D-1 が長径 96 cm、短径 72 cm、深さ 24 cm、D-2 が長径 76 cm、短径 43 cm、深さ 33 cm である。

遺物は土師器の坏・甕、須恵器の坏・高台付碗・甕・羽釜、灰釉陶器の碗が出土した。出土量は少な

く、竈付近に集中する。D-1からはほとんど出土しないが、D-2からは須恵器坏（第18図1・2）が出土している。

H-7号住居址（第13図） 東・西側を現代の搅乱に壊され、全体の約1/3の調査となった。床は住居中央部に硬化面が認められる。硬化面部分はロームと黒褐色土の混合土による貼床であるが、住居周縁はVI層を直接床としている。貼床は中央部が皿状に掘り込まれ（最深13cm）、ロームが主体として充填されている。この部分が最も強く硬化しており、上面には焼土・炭化物が散っている。竈は検出範囲内では見られなかった。ピットは1本検出され、ローム主体の貼床内に位置する。規模は、長径26cm、短径17cm、深さ12cmである。土坑状の掘り込みも2ヵ所検出され、D-1・D-2は埋没土に焼土・炭化物が混入する。また、掘り方調査の際にはD-3が検出された。規模は、D-1が長径64cm、短径46cm、深さ36cm、D-2が長径81cm、深さ17cm、D-3が長径56cm、短径52cm、深さ28cmである。

遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の蓋・高台付碗・甕が出土した。土器以外では、1区の床面より1～2cm浮いた状態で、鉄製の焼印（第21図1）と楕円形鉄滓（第20図6）が出土している。

2. 溝（遺構：第14図）

1条が確認され、M-9・10号溝が該当する。M-9・10号溝およびP-43・44・45号ピットと重複し、本溝が古い。概ね東西方向に直行し、方位はN-81°-Eを指す。両端は調査区外となる。断面は浅い逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、西から東へ緩やかに傾斜する。埋没土は黒色土を主体とし、自然埋没と推定される。遺物は出土しなかった。埋没土が住居址と似ていることから、古墳～奈良・平安時代の帰属と推測される。

3. 土坑（遺構：第14図）

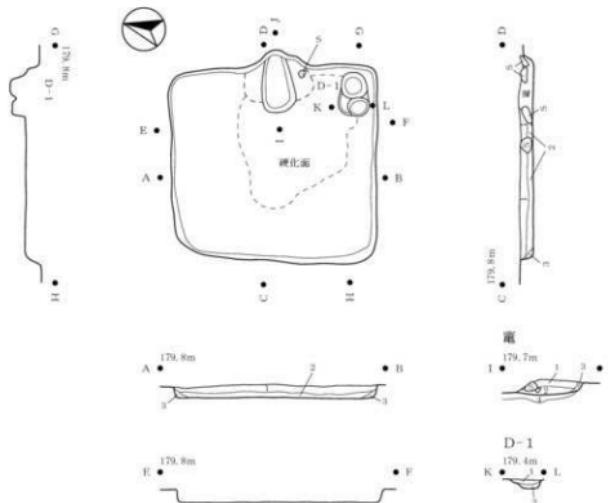
5基が確認され、D-1～5号土坑が該当する。この内、D-1～3号土坑は、東西方向に並んで検出され、長軸方位もN-19～21°-Wと近い数値を示す。平面は楕円形および隅丸長方形で、断面は浅い逆台形状を呈する。深さは17～24cmである。D-4号土坑は平面楕円形で、断面逆台形状を呈する。深さは33cmである。D-5号土坑は平面ほぼ円形で、断面U字状を呈する。深さは54cmである。埋没土は全て黒色土を主体とし、自然埋没と推定される。

遺物は、D-1・4号土坑で土師器坏・甕の破片、D-2号土坑で須恵器坏の破片、D-5号土坑で須恵器甕の口縁部片（第20図7）が出土している。出土遺物および埋没土が住居址と似ていることから、古墳～奈良・平安時代の帰属と推測される。

4. ピット（遺構：第4・25図）

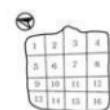
8基が検出され、P-42・43・44・45・48・54・56・60号ピットが該当する。平面はほぼ円形および楕円形を呈する。規模は、長径28cm～44cm、短径25cm～37cm、深さ18cm～47cmである。埋没土は黒色土を主体とし、自然埋没と推定される。埋没土が住居址と似ていることから、古墳～奈良・平安時代の帰属と推測される。

H-1号住



遺構名	層番	層名	色調	じまり	粘性	層入物				備考
						R	P	Y	白色粘土	
H-1	1	黒褐色土層		△	△	×	○	○	△	に赤い、黄褐色粘土○ に赤い、黄褐色粘土○
	2	黒褐色土層	2 < 1	◎	○	○	×	△	○	
	3	灰黃褐色土層	2 < 3	○	○	×	※	×	△	
	4	黒褐色土層	1 < 2	○	○	×	△	×	△	
D-1	1	黒褐色土層	2 < 3	○	○	×	△	×	△	福り方
	2	黒褐色土層	4 < 3	◎	○	△	×	×	△	

分割図

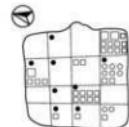
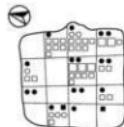


1層: 10 ~ 12 cm
2層: 8 ~ 10 cm
土器部 34kg
甕 5kg
陶器部 瓢 2.345kg
鐵製品 2点
鈎物石 5点

土器分布

1層

2層

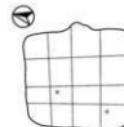
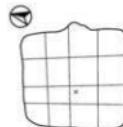


■●●●●●●●●
○○○○○○○○
□□□□□□□□
D-1(西側)
●●●●●●●●
○○○○○○○○
□□□□□□□□

石製品、鉄製品分布

1層

2層



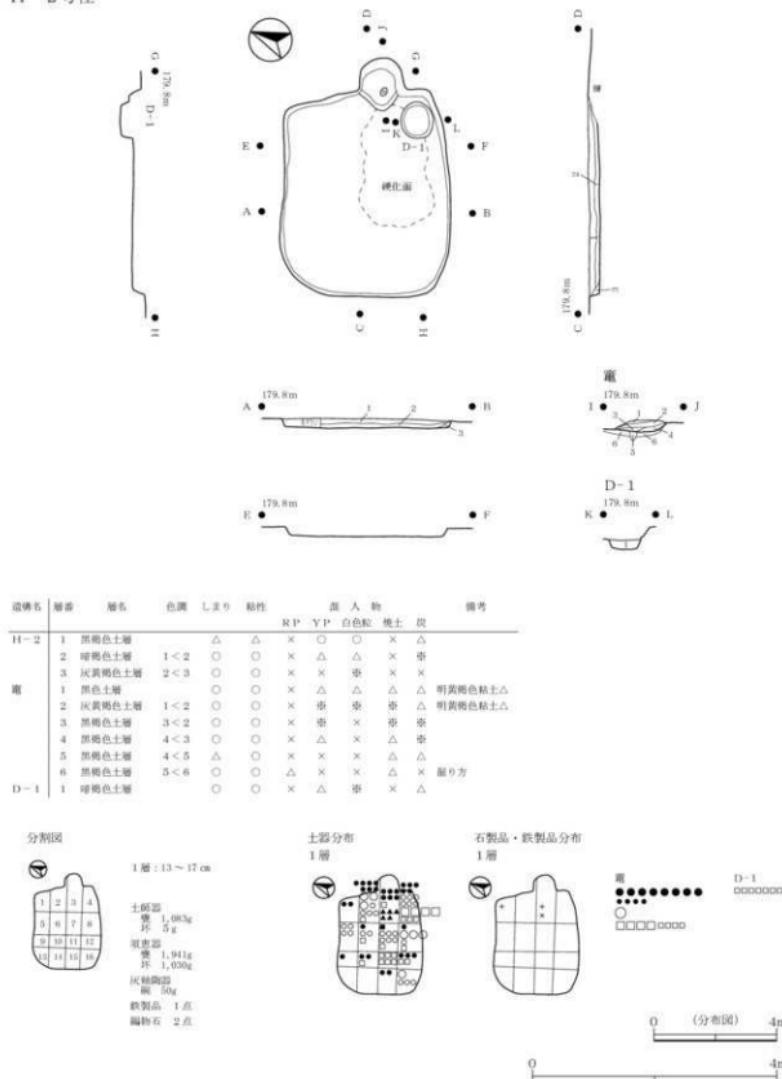
■+++

0

0 (分布図) 4m

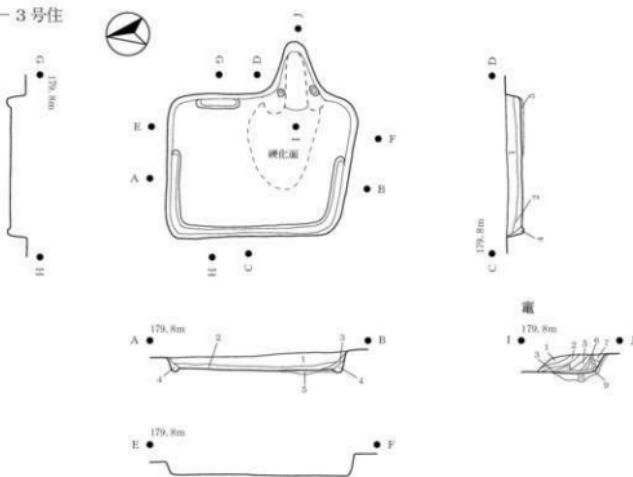
第6図 H-1号住居址実測図

H-2号住



第7図 H-2号住居址実測図

H-3号住

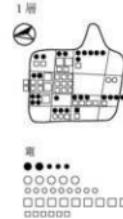


地層名	層番	層名	色調	しまり	黏性	埋入物					備考	
						R P	R B	Y P	白石板	焼土		
H-3	1	黒褐色土層				△	△	×	○	○	×	△
	2	黒褐色土層	1 < 2	○	○	○	×	△	△	△	△	
	3	黒褐色土層	2 < 3	○	○	×	×	※	※	×	×	
	4	褐灰色土層	3 < 4	○	○	×	×	※	※	×	×	
	5	褐色土層	5 < 4	○	○	○	○	×	×	×	× 脱り床	
	1	黒色土層		○	○	×	○	※	※	△	△	
	2	黑色土層	2 < 1	○	○	×	△	○	×	△	△	
	3	黒褐色土層	2 < 3	○	○	×	※	※	※	△	△	
	4	褐褐色土層	3 < 4	○	○	△	△	×	×	△	△	
	5	褐色土層	4 < 5	○	○	○	○	×	×	○	○	
H-3	6	明黄色土層	5 < 6	○	○	※	※	○	×	※	× 黒色土塊、ロームが主体	
	7	にじく明黄色土層	7 < 6	○	○	○	○	×	×	×	×	
	8	明黄色土層	7 < 8	○	○	※	○	×	×	※	× 黒色土△、ロームが主体	
	9	黒褐色土層	9 < 8	○	○	×	※	※	※	△	△	
	10	褐灰色土層	9 < 10	○	○	×	△	×	×	△	× 脱り方	

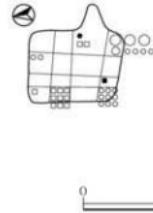
分割図



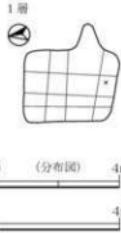
土器分布



2層

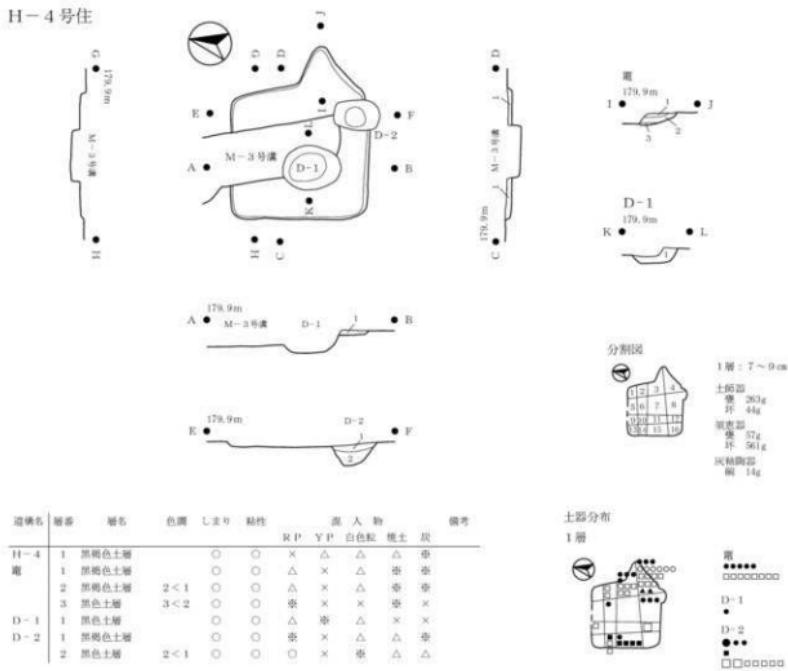


石製品・鉄製品分布

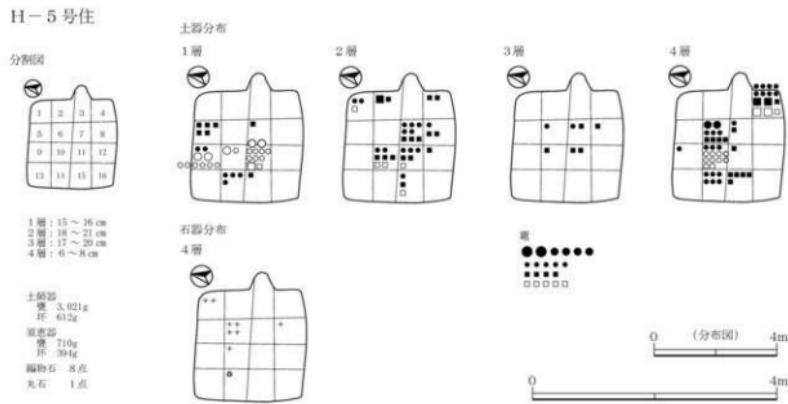


第8図 H-3号住居址実測図

H-4号住

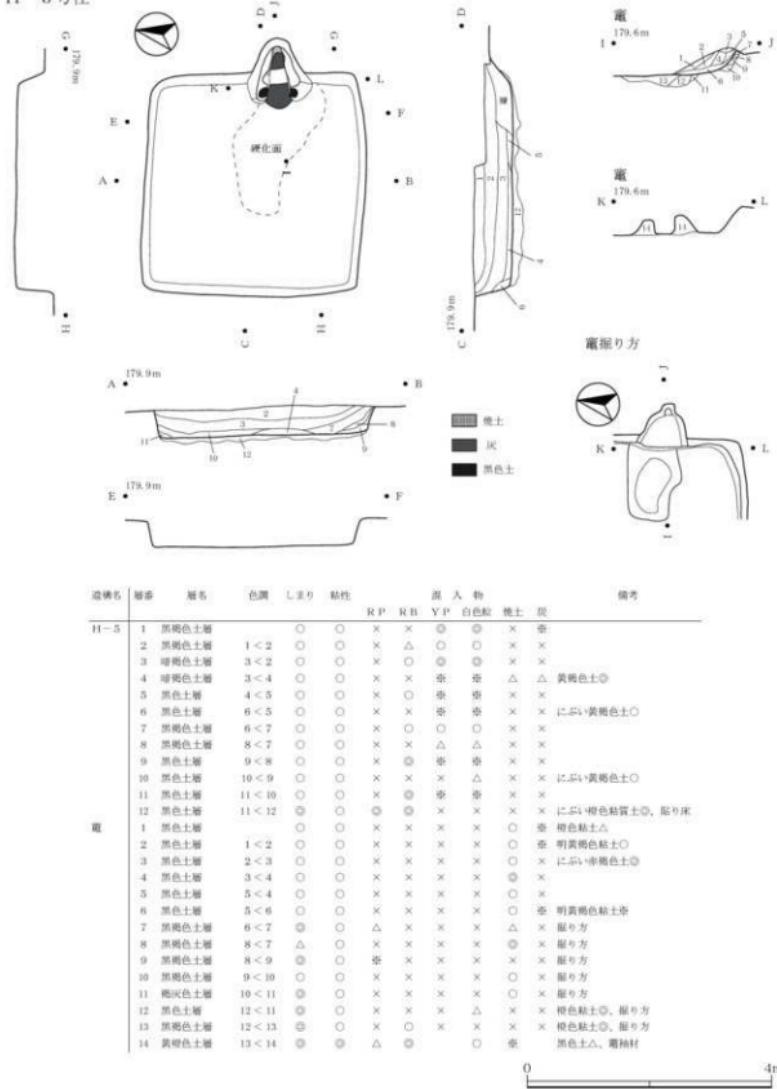


H-5号住



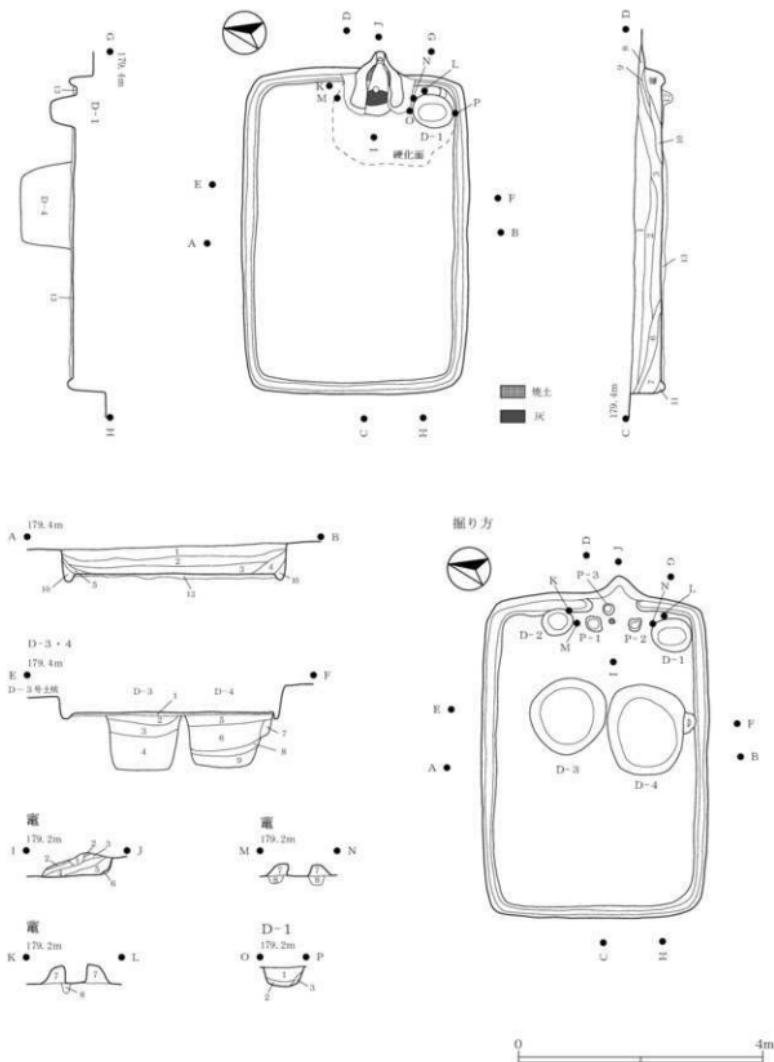
第9図 H-4・5号住居址実測図

H-5号住



第10図 H-5号住居址実測図

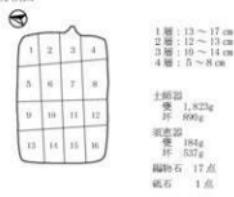
H-6号住



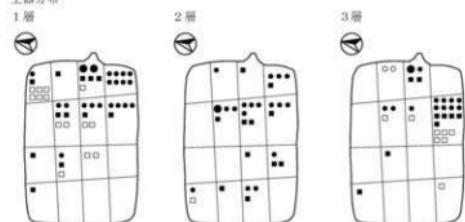
第11図 H-6号住居址実測図（1）

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粒性	混入物					備考	
						R P	R B	Y P	白色粒	焼土	炭	
H-6	1	黒色土層	○	○	○	×	○	○	○	×	△	
	2	黒色土層	2 < 1	○	○	○	○	○	○	△	△	
	3	黒色土層	2 < 3	○	○	△	△	△	△	●	△	
	4	黒褐色土層	3 < 4	○	○	※	×	※	※	×	※	
	5	褐色土層	4 < 5	○	○	△	×	×	×	×	×	
	6	黒褐色土層	6 < 5	○	○	○	○	×	○	△	△	
	7	暗褐色土層	6 < 7	○	○	○	○	×	○	○	×	黑色土△
	8	暗褐色土層	7 < 8	○	○	○	○	○	△	△	△	
	9	暗褐色土層	9 < 8	○	○	○	○	×	△	△	△	
	10	褐色土層	9 < 10	○	○	○	○	×	△	△	○	
	11	黒色土層	11 < 10	○	○	○	○	○	×	×	×	硬溝
	12	灰褐色土層	11 < 12	○	○	×	○	○	×	○	○	竪削のビット (P-1)
	13	黒褐色土層	13 < 12	○	○	○	○	○	×	×	×	粘り土
周	1	にぶい黄褐色土層	○	○	○	○	○	○	×	○	○	黒色土△
	2	暗褐色土層	2 < 1	○	○	○	○	○	×	○	△	
	3	にぶい赤褐色土層	2 < 3	○	○	○	○	○	×	○	●	黒色土△、土器出土
	4	暗赤褐色土層	4 < 3	○	○	○	○	○	×	○	△	黒色土△
	5	黒褐色土層	5 < 4	○	○	○	○	○	×	○	△	
	6	にぶい暗褐色土層	5 < 6	○	○	○	○	○	×	○	○	竪り方
	7	灰褐色土層	7 < 6	○	○	○	○	○	×	○	○	竪削
	8	灰褐色土層	8 < 7	○	○	○	○	○	×	○	○	
	9	暗褐色土層	8 < 9	○	○	○	○	○	×	○	○	
D-1	1	黒色土層	○	○	○	○	○	○	×	○	×	
	2	黒色土層	2 < 1	○	○	※	×	○	×	○	×	
D-3・4	3	黒色土層	3 < 2	○	○	○	○	○	×	×	×	黄褐色粘土ブロック○
	1	黒褐色土層	○	○	○	○	○	○	×	○	○	H-6の13層と同じ
D-1	2	褐色土層	1 < 2	△	○	△	○	○	×	○	×	黒色土△、D-3
	3	黒色土層	3 < 2	△	○	○	○	○	○	○	○	D-3
	4	褐色灰石層	3 < 4	△	○	○	○	○	×	○	○	黒色土○、D-3
	5	褐色灰石層	5 < 4	△	×	○	○	○	○	○	○	黒色土△、D-4
	6	褐色灰石層	6 < 5	△	×	○	○	○	○	○	○	黒色土○、D-4
	7	にぶい赤褐色土層	7 < 6	○	○	△	○	○	○	○	○	粘質土、壁面に貼り付けたものか、D-4
	8	黒色土層	8 < 7	△	○	○	○	○	○	○	○	D-4
	9	褐色灰石層	8 < 9	△	△	○	○	○	○	○	○	D-4

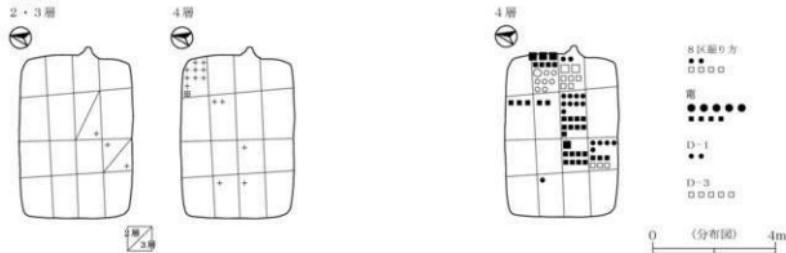
分割図



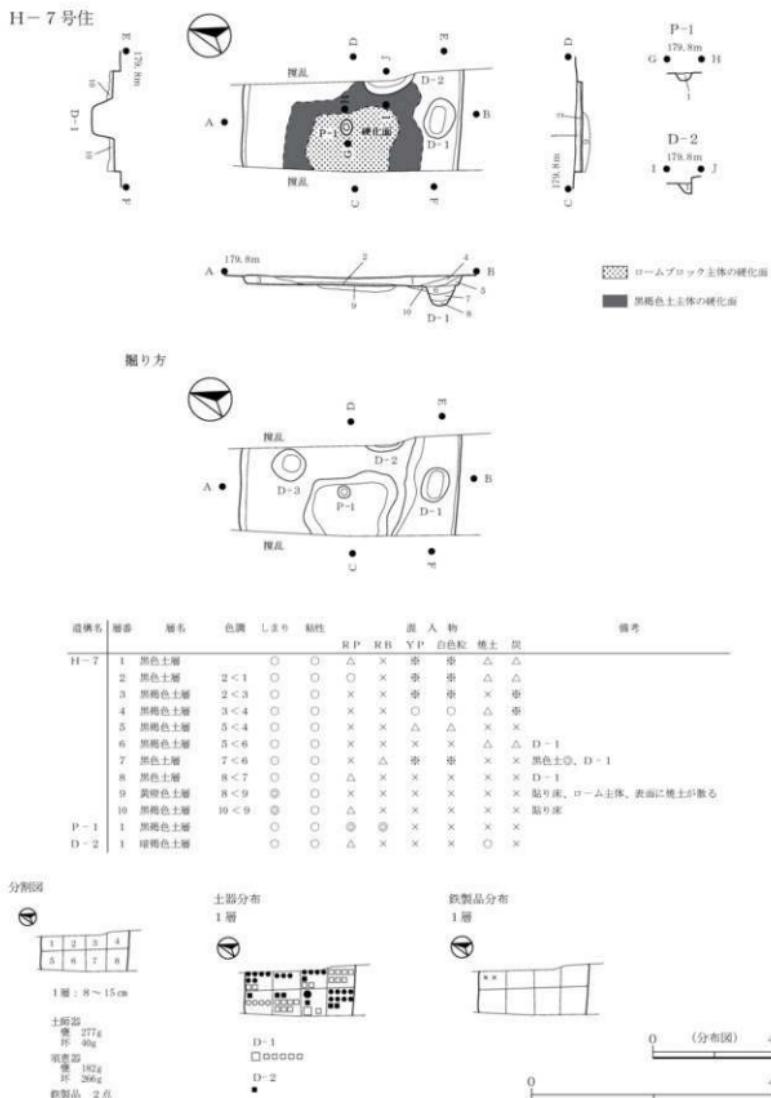
土器分布



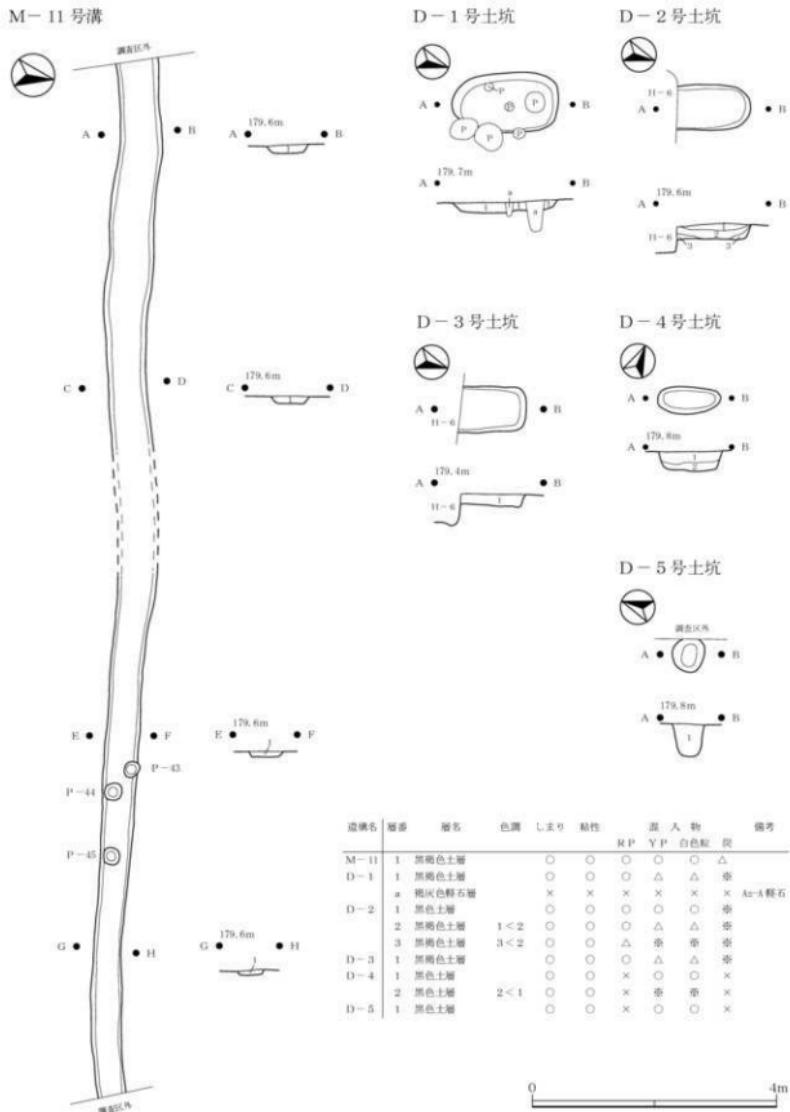
石器分布



第12図 H-6号住居址実測図(2)



第13図 H-7号住居址実測図



第14図 M-11号溝、D-1~5号土坑実測図

(2) 遺物

1. 古墳時代の土器（第20図）

器種は、須恵器甕が見られる。扁平な胴部で、底部は小さな平底である。胴部は2条の横位沈線の間に連続刺突文が施され、下位は回転笠ケズリとなる。遺物包含層（V層）からの出土である。

2. 奈良時代の土器（第18～19図）

器種は、土師器壺・盤・鉢・甕、須恵器高台付壺・蓋・甕が見られる。土師器壺は、丸底から口縁部が短く内傾・内湾・直立するもので、口径により大中小に分化する。第18図8は内底面に「X」の線刻がある。盤は体部の弱い稜線から外反する口縁部に至る。鉢は体部の深い丸底で、口縁部は直立する。甕は長胴で、胴部が直線的で縱方向の笠削りを施すタイプと、胴部上位にわずかな膨らみを持ち斜方向の笠削りを施すタイプがある。内面は横向方向の笠ナデで、第19図7のようにミガキが施されるものも見られる。須恵器高台付壺は平底から体部が直線的に立ち上がる。高台は内端が接地し、断面台形を呈する。底部回転笠ケズリである。蓋は短い返りを有するものである。甕は叩き整形の破片のみである。

3. 平安時代の土器（第15～18・20図）

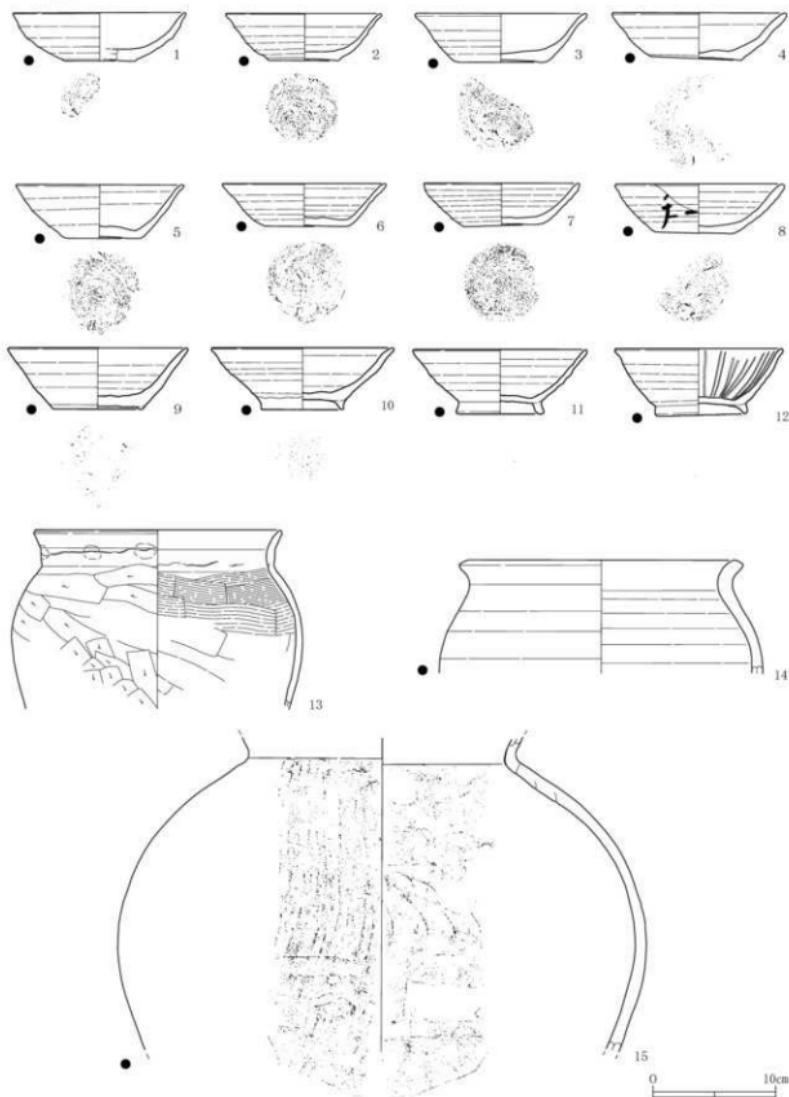
器種は、土師器壺・甕、須恵器壺・高台付碗・高台付皿・甕・瓶・瓶・羽釜、灰釉陶器碗が見られる。土師器壺は小片のため図示できるものはなかった。甕は器肉が厚くなる。口縁部が崩れた「コ」の字状を呈するものと、口縁部が短く外反するものがある。須恵器壺・高台付碗は口縁部がわずかに外反するものの、輪轂痕が顕著で体部が直線的なもの、体部下位にわずかな丸みを持ち口縁部が外反するものがある。底部は全て回転糸切り未調整である。焼成は酸化焰が主体を占める。高台の断面形状は三角形と台形がある。第15図12は内面に放射状の暗文が施されている。高台付皿は底部回転糸切り未調整で、断面三角形の高台が付く。酸化焰焼成である。墨書土器は2点確認された。第15図8の壺（体部外面：「秋」と第16図7の高台付皿（内底面：判読不明）である。須恵器甕は叩き整形と輪轂整形があり、酸化焰焼成が主体となる。瓶・羽釜は輪轂成形で、羽釜の口唇部は水平またはやや内傾し、断面三角形の锷が付く。焼成は酸化焰である。灰釉陶器碗は体部が浅く開く器形で、底部は回転笠削りである。高台が三日月状を呈し、釉薬刷毛塗りの第20図9と、三日月高台の屈曲が緩やかになり、釉薬漬け掛けの第16図8・第18図4がある。

4. 鉄製品・鉄滓・石製品・編物石（第16・17・19～21図）

鉄製品・鉄滓は、平安時代のH-1・2・3・7号住居址から出土した。器種は刀子、鎌、焼印が確認された。鉄滓は楕円形鉄滓である。石製品は、奈良時代のH-6号住居址から砥石が1点出土した。石材は安山岩で、角柱状を呈し、1面に研磨による産みが認められる。

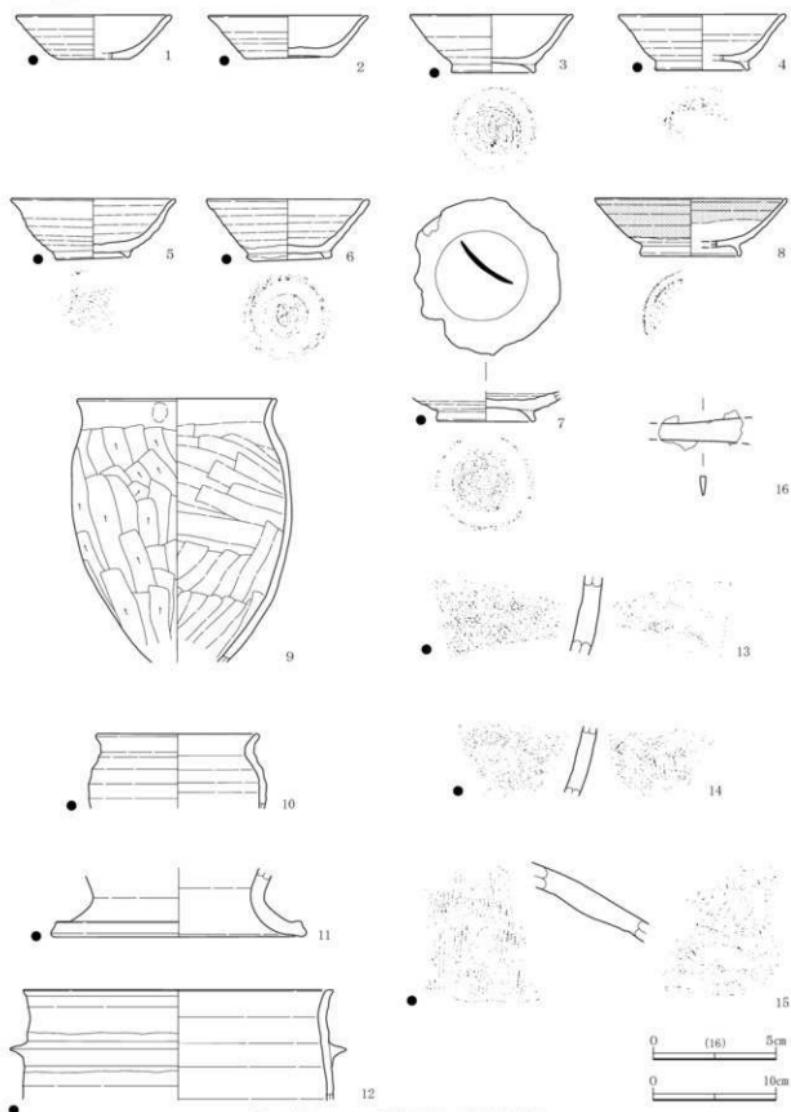
編物石は、全て安山岩である。奈良時代の住居址からは、H-5号住居址で8点、H-6号住居址で17点（内欠損1点）が出土した。大きさの平均値は（欠損を除く）、重量490.07g、長さ13.2cm、幅6.1cm、厚さ4.2cmである。平安時代の住居址からは、H-1号住居址で5点（内欠損1点）、H-2号住居址で2点が出土した。大きさの平均値は（欠損を除く）、重量601.83g、長さ14.0cm、幅6.6cm、厚さ4.7cmである。

H-1号住



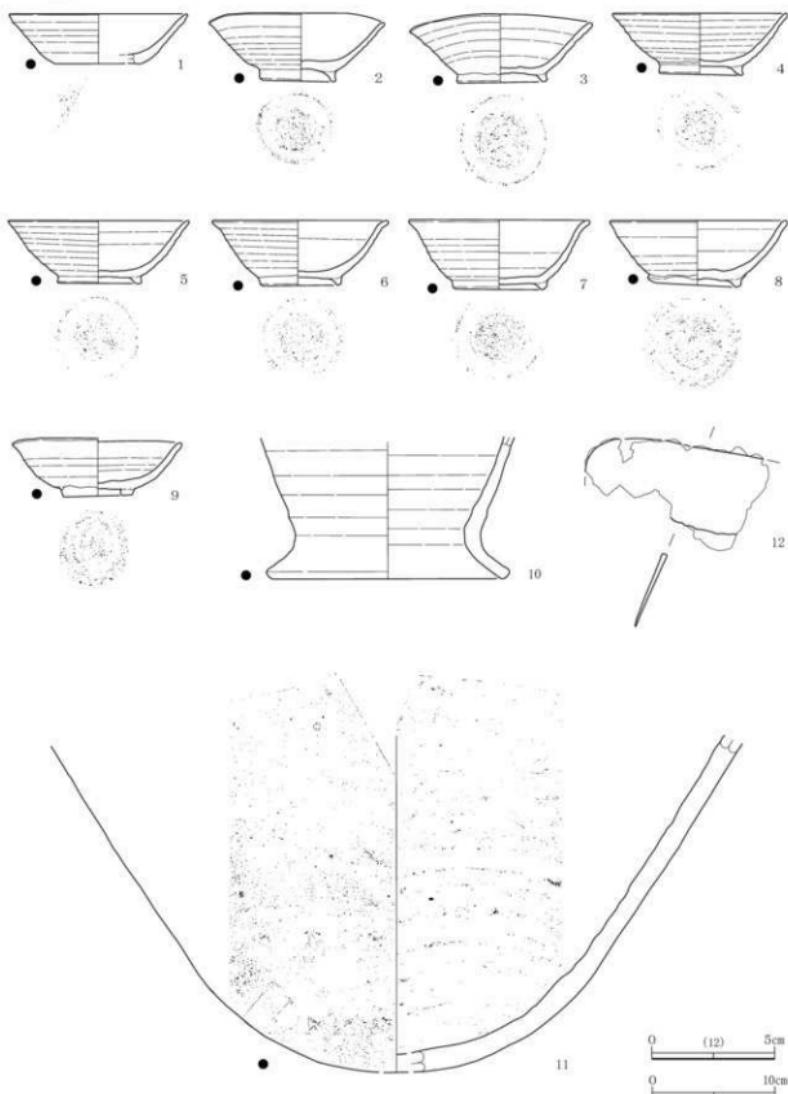
第15図 H-1号住居址 遺物実測図

H-2号住



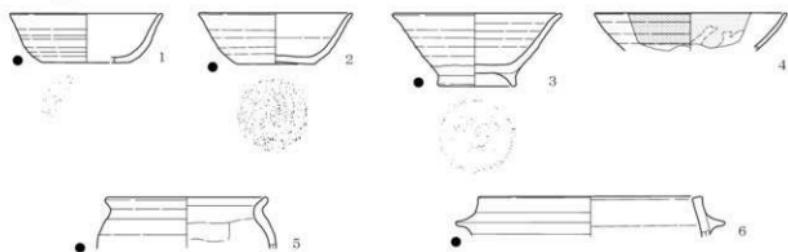
第16図 H-2号住居址 遺物実測図

H-3号住

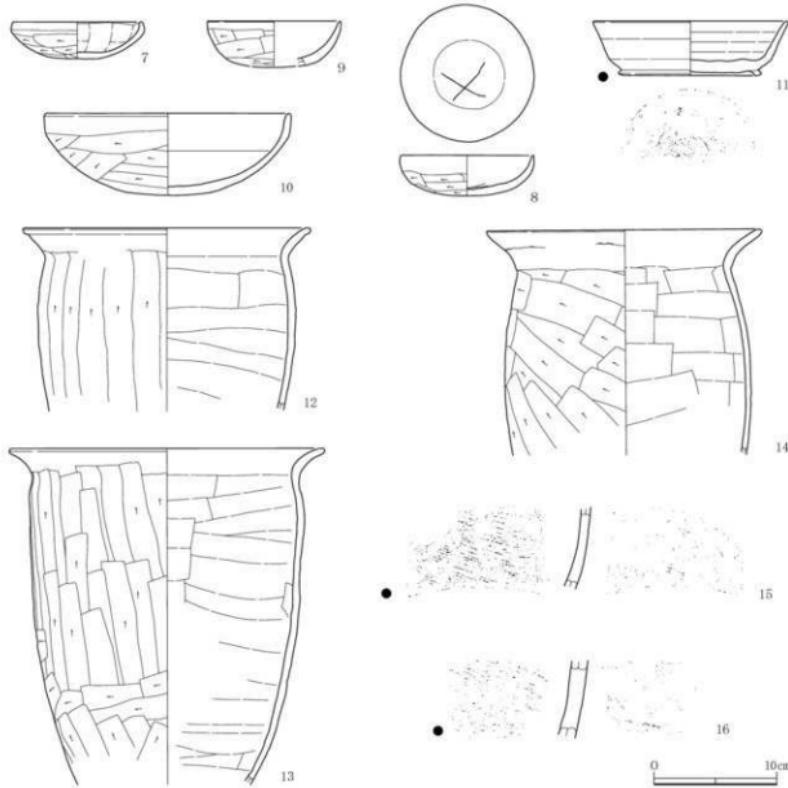


第17図 H-3号住居址 遺物実測図

H-4号住

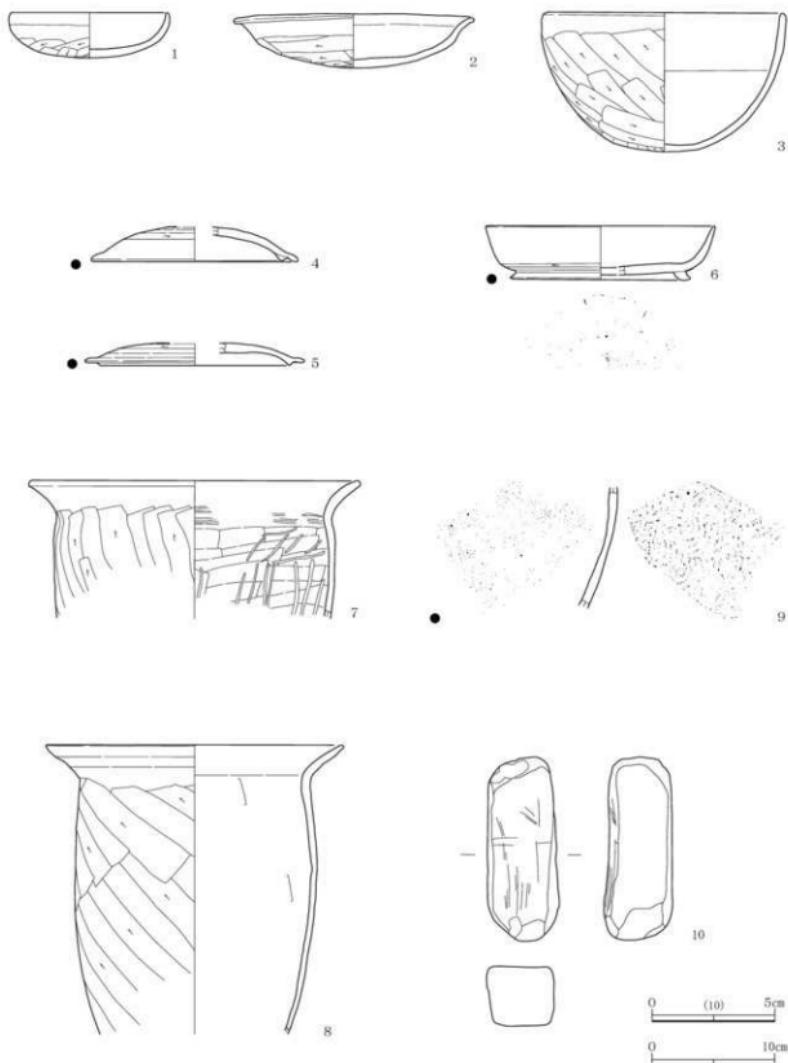


H-5号住



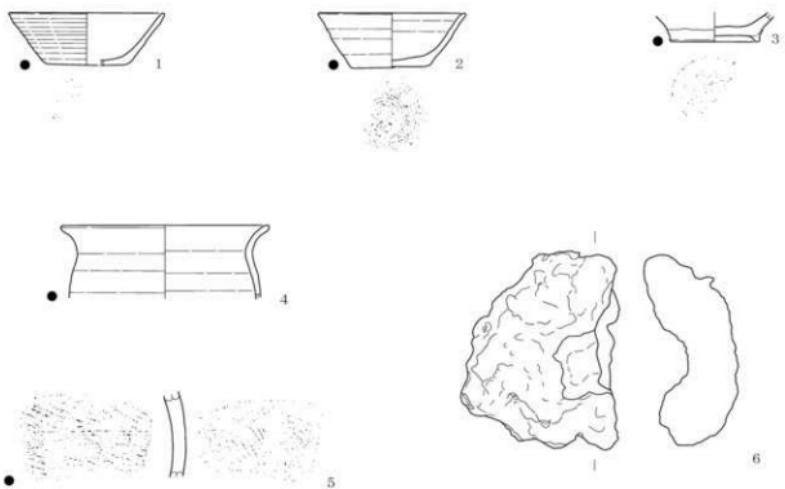
第18図 H-4・5号住居址 遺物実測図

H-6号住



第19図 H-6号住居址 遺物実測図

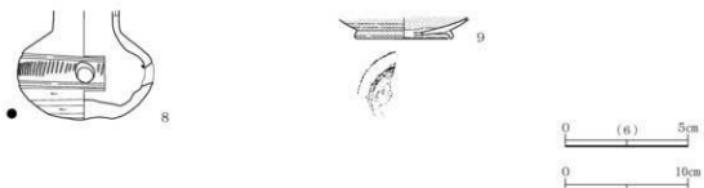
H-7号住



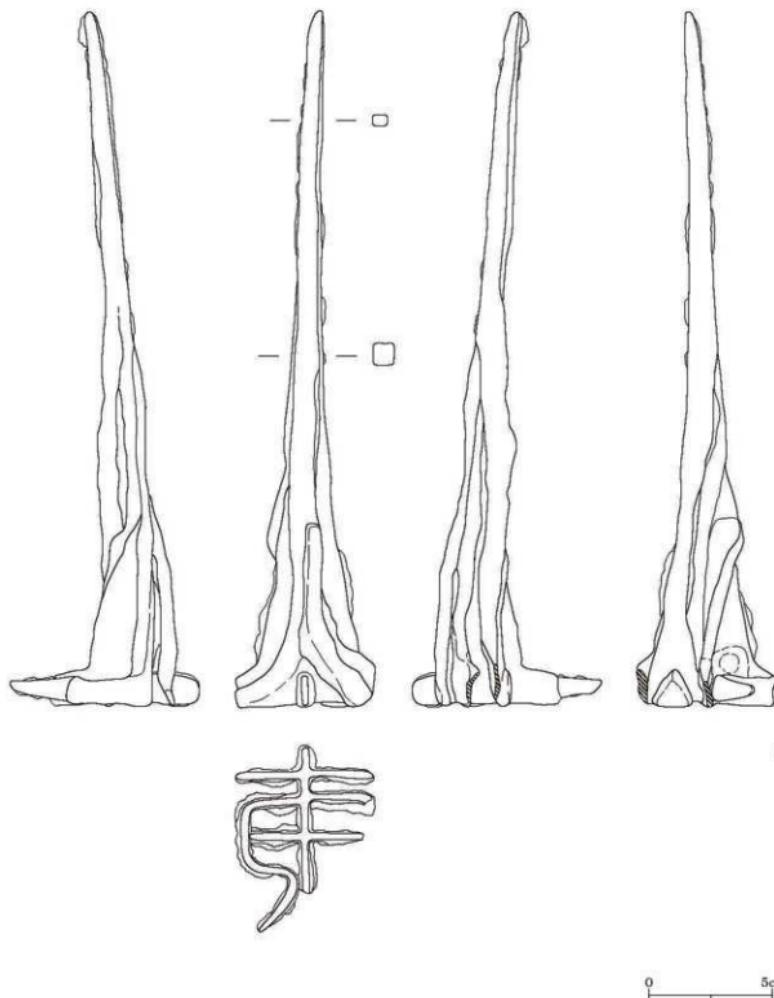
D-5号土



遺構外



第20図 H-7号住居址、D-5号土坑、遺構外 遺物実測図



第21図 H-7号住居址 遺物実測図

4 近世の遺構

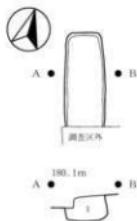
1. 溝（第22～24図）

12条が確認され、M-1～10・12・13号溝が該当する。断面は箱状を呈し、底面はほぼ平坦である。走行方位はN-15°～22°-W（北西-南東）およびN-66°～72°-E（南西-北東）の2方向に分かれる。規模は、長さ253～763cm、幅44～88cm、深さ12～40cmである。埋没土は浅間A軽石が主体となり、人為による埋め戻しの様相を示す。遺物は、M-2～4・6～10・12号溝で土師器甕、須恵器壺・甕、灰釉陶器碗・近世陶器碗・甕、近世在地系土器鍋等の破片が少量出土している。

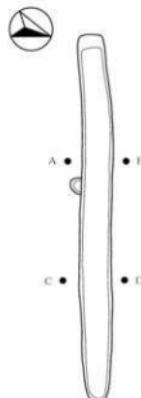
2. ピット（第4・25図）

52基が確認され、P-1～41・46・47・49～53・55・57～59号ピットが該当する。平面は梢円形およびほぼ円形を呈する。規模は、長径17cm～87cm、短径13cm～44cm、深さ10cm～74cmである。P-1～38号ピットは、不揃いながらも2基ずつ逆「L」字状に並ぶが、深さは一定ではない。北西側には空闊地が広がり、区画を目的としたものと推測される。埋没土は浅間A軽石を含む褐色灰色土が主体となる。遺物は、土師器壺・甕、須恵器壺・甕の小片がわずかに出土している。

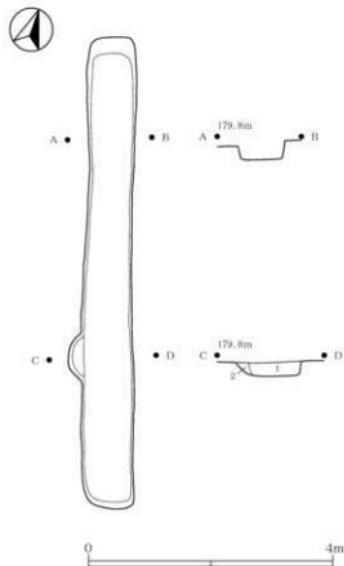
M-1号溝



M-2号溝

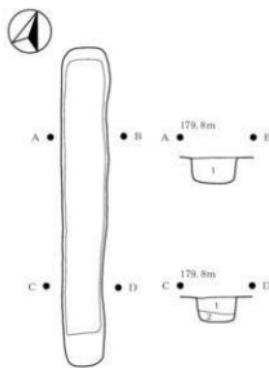


M-3号溝

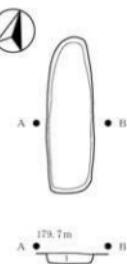


第22図 M-1～3号溝実測図

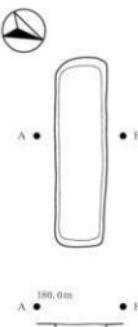
M-4号溝



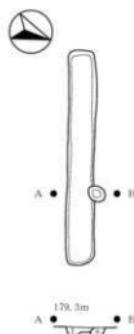
M-5号溝



M-6号溝



M-7号溝

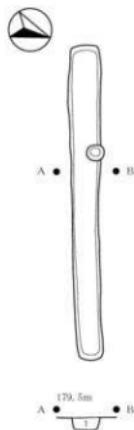


造構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
						A	Y	P	
M-1	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石
M-2	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石
	2	褐色土層	2<1	△	○	○	×	×	
M-3	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石
	2	褐色灰石層	2<1	×	×	×	○	×	Ar-A輕石
M-4	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石
	2	黑色土層	2<1	○	○	○	×	×	褐色土ブロック△
M-5	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石
M-6	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石
M-7	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石
a	褐色土層		○	○	○	△	△	△	
M-8	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石
M-9	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石
M-10	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石
M-11	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石
M-12	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石
M-13	1	褐色灰石層	×	×	×	×	×	×	Ar-A輕石

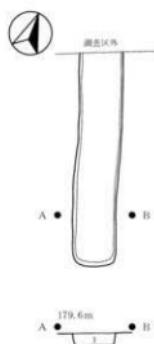
0 4m

第23図 M-4~7号溝実測図

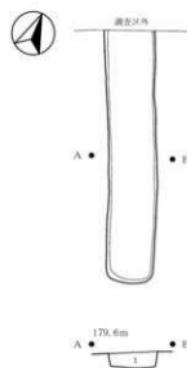
M-8号溝



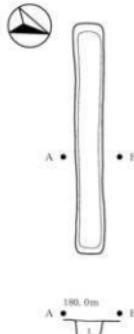
M-9号溝



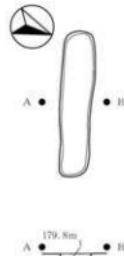
M-10号溝



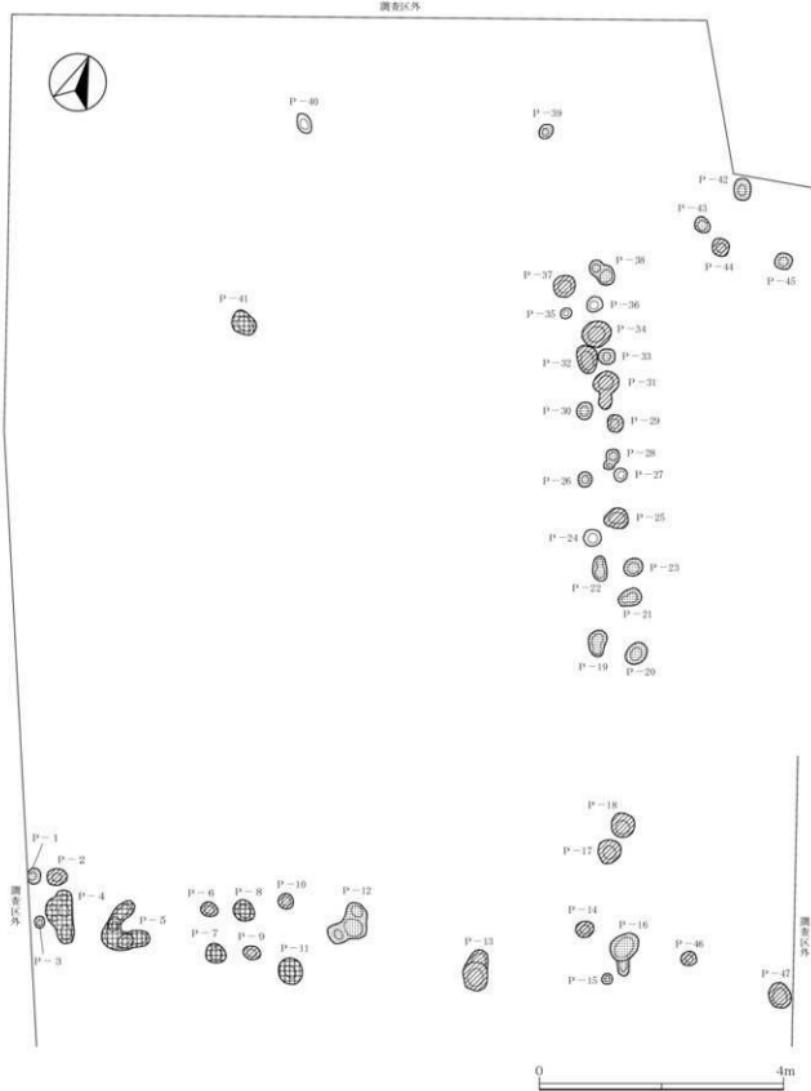
M-12号溝



M-13号溝



第24図 M-8~10・12・13号溝実測図



第25図 P-1～47号ピット実測図

住居址観察表

(単位: m)

遺構名	平面形態	規模			壁構	主軸方向	柱穴	土坑 野籠 床下	貼床	電		遺物	時期	備考	
		長軸	短軸	深さ						位置	構造				
H-1	中形正方形	3.22	3.08	0.22	×	N-76°-E	×	南東竪	×	東壁中央	B	○	10c前	黒土器出土。	
H-2	小形横長方形	3.18	2.62	0.17	×	N-70°-E	×	南東竪	×	東壁南寄り	B	△	10c前	黒土器出土。	
H-3	小形横長方形	2.84	2.18	0.27	部分的	N-109°-E	×	×	×	東壁南寄り	B	○	10c前		
H-4	小形正方形	2.20	2.06	0.09	×	N-79°-E	×	×	×	東壁南寄り	不明	※	10c前		
H-5	中形正方形	3.42	3.27	0.64	×	N-82°-E	×	×	×	東壁南寄り	A	○	8c前	黒土器出土。	
H-6	中形横長方形	5.12	3.58	0.47	全周	N-79°-E	×	南東竪	2	○	東壁南寄り	A	○	8c前	
H-7	不明	(3.46)	(1.61)	0.15	×	N-75°-E	×	不明	2	○	不明	不明	△	10c前	傳印出土。

凡例 平面形態 小形：4 m以下 中形：4～6 m 大形：6 m以上

規模 ()：推定値 < >：残存値

電構造 A：ローム+黒土色 B：ローム+黒土色+抽芯窓

遺物出土量 土器類 ※：1～1000g △：1000～5000g ○：5000～10000g ⊖：10000g以上

溝観察表

(単位: m)

遺構名	断面形態	規模			遺物	時期	備考
		長さ	幅	深さ			
M-1	箱状	(1.52)	0.60	~ 0.68	0.40	×	1783年以前
M-2	箱状	6.08	0.44	~ 0.52	0.20	古世陶器帯	1783年以前
M-3	箱状	7.63	0.72	~ 0.88	0.32	土師器・須恵器帯	1783年以前 H-4と重複、本溝が新しい。
M-4	箱状	5.16	0.64	~ 0.80	0.40	土師器帯	1783年以前
M-5	箱状	2.53	0.52	~ 0.80	0.17	×	1783年以前 H-5と重複、本溝が新しい。
M-6	箱状	3.12	0.80	~ 0.86	0.33	近世在墳系土器帯	1783年以前 H-41と重複、本溝が古い。
M-7	箱状	3.49	0.44	~ 0.48	0.15	土師器帯	1783年以前 H-6と重複、本溝が新しい。
M-8	箱状	5.12	0.44	~ 0.52	0.21	須恵器帯	1783年以前 H-6と重複、本溝が新しい。
M-9	箱状	(3.53)	0.68	~ 0.72	0.22	土師器・須恵器帯	1783年以前 M-11と重複、本溝が新しい。
M-10	箱状	(4.16)	0.72	~ 0.84	0.26	土師器・須恵器帯	1783年以前 M-11と重複、本溝が新しい。
M-11	逆台形状	(16.83)	0.44	~ 0.76	0.14	×	古墳～古代 M-9・10およびP-43～45と重複、本溝が古い。
M-12	箱状	3.74	0.44	~ 0.52	0.32	古世陶器帯	1783年以前
M-13	箱状	2.36	0.48	~ 0.56	0.12	×	1783年以前

土坑観察表

(単位: m)

遺構名	平面形態	規模			断面	遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ				
D-1	椭円形	1.75	0.96	0.17	逆台形状	土師器帯・甕帯	古墳～古代 P-32・34～37と重複、本土坑が古い。	
D-2	楕円形か	<1.20	0.74	0.24	逆台形状か	須恵器帯	古墳～古代 H-6と重複、本土坑が古い。	
D-3	楕丸長方形か	(1.08)	0.71	0.20	逆台形状か	×	古墳～古代 H-6と重複、本土坑が古い。	
D-4	椭円形	1.02	0.45	0.33	逆台形状	土師器帯・甕帯	古墳～古代 M-9・10およびP-43～45と重複、本溝が古い。	
D-5	円形	(0.53)	0.52	0.54	U字状	須恵器帯	古墳～古代	

ピット観察表

(単位: m)

遺構名	規格	規格			遺構名	規格	遺構名	規格	遺構名	規格		
		長径	短径	深さ								
P-1	27	-	20		P-13	68	39	57	P-25	40	23	53
P-2	33	27	54		P-14	29	26	50	P-26	25	23	24
P-3	20	16	20		P-15	17	16	20	P-27	22	22	14
P-4	87	44	62		P-16	51	40	37	P-28	25	23	35
P-5	80	27	71		P-17	40	38	45	P-29	32	30	47
P-6	29	22	51		P-18	39	39	59	P-30	28	25	26
P-7	34	32	67		P-19	44	29	36	P-31	63	42	40
P-8	37	32	62		P-20	40	32	36	P-32	46	33	45
P-9	29	22	58		P-21	27	29	36	P-33	28	25	30
P-10	25	24	54		P-22	41	31	34	P-34	48	41	52
P-11	44	37	74		P-23	31	28	36	P-35	18	18	16
P-12	74	42	37		P-24	28	27	17	P-36	27	23	10

第2表 遺構観察表

探査孔番号	地層名	区	層	種類	器種	口径	法面 (m)	成・整形技術の特徴			備考	
								空色潤	③施工 良好	外		
5 図	1 - 沃	-	-	圓文	深杯	-	-	石英・白色粒・側部片	半乾管状工具による取扱い。	内面	内面粗乱。中間切削 (五頭ヶ台式)。	
2	C - 1	-	V	圓文	深杯	-	-	黑色粒	側部片	外	中間切削 (五頭ヶ台式)。	
3	H - 6	-	-	土器	圓文	深杯	-	片岩・白色粒・側部片	半乾管状工具による横底比削ナメ。	内面	右穴。	
4	C - 1	-	V	圓文	深杯	-	-	黑色粒	側部片	外	中間削除 (阿玉台 1 口穴)。	
15 図	1 H - 1 D 1 西 + 4	D 1 西	2	須地層	杯	(3.3) 7 (5.8) 4.1	化	明示地色	左斜面引文、幅広工具による逐段押引文、三角押文。	内面	中間削除 (勝板 1 口)。	
2	H - 1 D 1 西	上	須地層	杯	12.7	5.7	3.8	化	明示地色	内面	側壁整形、底部回転式切削。	
3	H - 1 薩	上	須地層	杯	(13.9) 7 (0)	4.0	化	浅黄色	チヤー卜・白色粒	内面	側壁整形、底部右回転式切削。	
4	H - 1 4 + 12 2 + 1 + 4	須地層	杯	(14.1) 7 (4.9)	3.9	化	白色	白色粒・黑色粒	チヤー卜・白色粒	内面	側壁整形、底部右回転式切削。	
5	H - 1 4	1	須地層	杯	13.6	6.1	4.4	化	白色	チヤー卜・白色粒	内面	側壁整形、底部右回転式切削。
6	H - 1 4	床面以上	須地層	杯	13.3	6.9	3.5	化	白色粒・黑色粒	チヤー卜・白色粒	内面	側壁整形、底部右回転式切削。
7	H - 1 5	床面上	須地層	杯	12.6	6.3	3.6	化	天色	白色粒	内面	側壁整形、底部右回転式切削。
8	H - 1 D 1 東	底面付近	須地層	杯	(13.7) 6 (4)	4.1	化	白色	白色粒・黑色粒	チヤー卜・白色粒	内面	側壁整形、底部右回転式切削。
9	H - 1 D 1 東	底面付近	須地層	碗	(14.5) 7 (0)	5.0	化	浅黄色	白色粒・黑色粒	チヤー卜・白色粒	内面	側壁整形、底部右回転式切削。
10	H - 1 13	1	須地層	高台付	(14.8) 6 (7)	5.1	化	白色	白色粒・黑色粒	チヤー卜・白色粒	内面	側壁整形、底部右回転式切削。
11	H - 1	上	須地層	碗	(14.1) 6 (9)	5.3	2.0	天色	白色粒	チヤー卜・白色粒	内面	側壁整形、底部右回転式切削。
12	H - 1 7 + 11	1	須地層	高台付	13.6	7.1	5.5	化	白色	チヤー卜・白色粒	内面	側壁整形、底部右回転式切削。
											前面部分にスス付着、二次燃熱。	

第3表 土器観察表 (1)

成・整形技法の特徴										備考	
種別	番号	遺跡名	区	層	種類	器種	口径	法縫 (cm)	内面		
15 団	13	H-1	竪	上	須地器	壺	(20.1)	—	口縫部～脚部 斜面	口縫部横ナデ・指頭痕、脚部上半木口 内外面に疏状單位	
14	14	H-1	竪	上	須地器	壺	(22.0)	—	白色粒・黑色粒 白色粒・小壺	口縫部～脚部 斜面	
15	14-1	竪+5	上+1	須地器	壺	—	—	(25.8)	白色化 灰青+7°色	口縫部～脚部 斜面	
16 団	1	H-2	竪	上	須地器	壺	(12.6)	3.6	白色化 白色粒・黑色粒	口縫部～脚部 斜面	
2	14-2	竪	上	須地器	壺	13.0	7.2	3.5	白色化 白色粒・黑色粒 白色化	口縫部・黑色粒斜切口 白色粒・黑色粒斜切口	
3	14-2	竪	上	須地器	高台付	(13.2)	6.5	4.8	白色化 白色粒・黑色粒 白色化	口縫部・黑色粒斜切口 白色粒・黑色粒斜切口	
4	14-2	竪	上	須地器	高台付	(13.6)	(7.4)	4.6	白色化 白色粒・黑色粒 白色化	口縫部・黑色粒斜切口 白色粒・黑色粒斜切口	
5	14-2	4	1	須地器	高台付	13.4	(5.8)	(5.0)	白色化 白色化 白色化	口縫部・黑色粒 白色化 白色化	
6	14-2	4	1	須地器	高台付	13.2	6.2	5.1	白色化 白色粒・黑色粒 白色化	口縫部・黑色粒 白色化 白色化	
7	14-2	竪	上	須地器	高台付	—	7.9	(2.5)	白色化 白色粒・黑色粒 白色化	口縫部・黑色粒 白色化 白色化	
8	14-2	3	1	灰釉	壺	(15.7)	(8.0)	4.7	甕白色 甕白色 甕白色	口縫部・黑色粒 口縫部・黑色粒 口縫部・黑色粒	
9	H-2	2+3	1+1	須地器	壺	16.1	—	(21.6)	良好 白色化 白色化	口縫部～脚部 斜面	
10	H-2	7+竪	1+上	須地器	小型壺	(13.1)	—	(6.1)	白色化 白色化 白色化	口縫部～脚部 斜面	
11	H-2	竪	上	須地器	壺	—	(20.4)	(5.6)	白色化 白色化 白色化	口縫部～脚部 斜面	
12	H-2	竪	上	須地器	釜	(25.4)	—	(9.0)	白色化 白色化 白色化	口縫部～脚部 斜面	
13	H-2	2	1	須地器	壺	—	—	—	甕元 甕元 甕元	口縫部～脚部 斜面	
14	H-2	2	1	須地器	壺	—	—	—	甕元 甕元 甕元	口縫部～脚部 斜面	
15	H-2	3	6	1	須地器	壺	(14.6)	7.0	4.1	白色化 白色化 白色化	口縫部～脚部 斜面
17 団	1	H-3	6	1	須地器	壺	—	—	—	口縫部 口縫部 口縫部	口縫部～脚部 斜面

第4表 土器觀察表 (2)

成・断面形状の特徴												
種別No.	番号	地盤名	区	層	種別	器種	法筋 (cm)	口筋	底筋	断面	外観	
③施工	④色調	⑤地盤	外観	内面	備考							
17回 2	H-3 3+竪	床面直上 +下	須地器 須白付	高台付 高台付	14.3 14.9	5.9 7.1	5.6 5.6	化 化	白色 白色	口筋部・小窓 口筋部・小窓	1/4~4 1/4~3	器形に歪み、外 にスリ付着。 器形に歪み。
3	H-3 4	床内+下 須白付	須地器 須白付	高台付 高台付	14.2 14.8	6.6 6.6	5.1 5.2	化 化	白色 黄色	口筋部～体部 口筋部～体部	輪縫整形、底筋軸系切り、輪縫整形。 輪縫整形、底筋軸系切り、輪縫整形。	
4	H-3 竪+3	床内+1 +下	須地器 須白付	高台付 高台付	14.2 14.8	6.6 6.6	5.1 5.2	化 化	白色 黄色	口筋部一部 口筋部	高台點付後輪縫ナフ。 高台點付後輪縫ナフ。	
5	H-3 1+2 +6	1+2 9+14 1+下 直上	須地器 須白付	高台付 高台付	14.2 14.7	6.3 7.0	5.3 5.7	化 化	白色 黑色	口筋部・黑色 口筋部・黑色	輪縫整形、底筋軸系切り、輪縫整形。 輪縫整形、底筋軸系切り、輪縫整形。	
6	H-3 7	9+14 1+下 直上	須地器 須白付	高台付 高台付	14.3 14.7	6.6 7.0	5.4 5.7	化 化	白色 黑色	口筋部 口筋部	輪縫整形、底筋軸系切り、輪縫整形。 輪縫整形、底筋軸系切り、輪縫整形。	
8	H-3 3	1 1+下 直上	須地器 須白付	高台付 高台付	14.3 14.7	6.6 7.0	5.4 5.7	化 化	白色 黑色	口筋部 口筋部	輪縫整形、底筋軸系切り、輪縫整形。 輪縫整形、底筋軸系切り、輪縫整形。	
9	H-3 2	1 1+下 直上	須地器 須白付	高台付 高台付	13.8 13.8	5.6 5.6	4.8 4.8	化 化	白色 灰色	口筋部 口筋部	輪縫整形、底筋軸系切り、輪縫整形。 輪縫整形、底筋軸系切り、輪縫整形。	
10	H-3 3	1 1+下 直上	須地器 須白付	高台付 高台付	— (19.0)	— (19.0)	— (11.7)	化 化	白色 白色	口筋部下～底 口筋部下～底	輪縫整形、輪筋格子目付き後輪縫ナフ。 輪筋格子目付き後輪縫ナフ。	
11	H-3 4	床面直上 直上	須地器 須白付	高台付 高台付	— (12.4)	— 7.2	— 4.1	化 化	灰色 白色	口筋部下半～底 口筋部下半～底	輪筋整形、輪筋格子目付き後輪縫ナフ。 輪筋格子目付き後輪縫ナフ。	
12	H-4 D-2	上 上	須地器 須白付	高台付 高台付	12.4 12.4	6.4 6.4	4.2 4.2	化 化	白色 白色	口筋部 口筋部	輪縫整形、輪筋格子目付き後輪縫ナフ。 輪筋格子目付き後輪縫ナフ。	
3	H-4 4+12	1+1 1+1	須地器 須白付	高台付 高台付	(13.7) (6.1)	6.0 6.0	— —	化 化	白色 白色	口筋部 口筋部	輪縫整形、底筋軸系切り、輪縫整形。 輪縫整形、底筋軸系切り、輪縫整形。	
4	H-4 4	1 1	床面 須白	高台 高台	(15.6) —	— (3.1)	— —	— —	白色 黑色	口筋部 口筋部	輪縫整形。 輪縫整形。	
5	H-4 4	1 1	須地器 須白付	小型便 痔浴器	(13.0) —	— (4.2)	— 化	— 化	白色 黄色	口筋部～胴部 上位片	輪縫整形、口筋高張ナフ。 輪筋整形、口筋高張ナフ。	
6	H-4 4	1 1	須地器 須白付	痔浴器 痔浴器	(18.2) —	— (3.3)	— 化	— 化	白色 白色	口筋部 口筋部	輪縫整形、脚貼付後機ナフ。 輪筋整形、脚貼付後機ナフ。	
7	H-5 5	1 2	土砂器 土砂器	高台付 高台付	(10.5) 10.8	— —	3.0 3.3	明赤地 赤地	白色 白色	口筋部 口筋部	口筋高張ナフ、体部強削ナフ。 口筋高張ナフ、体部強削ナフ。	
8	H-5 5	2 2	土砂器 土砂器	高台付 高台付	(10.9) —	— (3.7)	— —	— —	白色 白色	口筋部 口筋部	口筋強～体部強ナフ。 口筋強～体部強ナフ。	

第5表 土器観察表 (3)

種群No.	通称名	区	層	種類	寄宿	法量 (cm)	成・整形技術の特徴		備考	
							口径	茎高		
18 団	H-5	4	床面直上	土壌器	环	(19.9)	—	6.7 普通	①後成 茎色黒 褐色	1 / 2 輪轉形、底面部削り、体部削り。
11	H-5	4	床面直上	須地器	高台付	(18.9)	4.4	7 黒元	白色板	1 / 2 輪轉形、底面部削り。
12	H-5	6	床面直上	土壌器	彫	(23.3)	—	(14.9) 普通	赤褐色	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部板前方の 輪轉形構ナデ、脚部黒・斜方 輪轉形。
13	H-5	11+彫	床面直上	土壌器	彫	25.6	—	(27.5) 普通	赤褐色	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部上半段方 向の削り。
14	H-5	1 + 14	3 + 4 + +彫	土壌器	彫	22.3	—	(18.5) 普通	白色板・黑色板 黒色板	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部斜方向の 削り。
15	H-5	10	1	須地器	彫	—	—	蓬元	白色板・黑色板 白色板	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部斜方 向の削り。
16	H-5	9	1	須地器	彫	—	—	蓬元	白色板	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部斜方 向の削り。
19 団	H-6	11	4	土壌器	环	12.8	—	3.7 普通	白色板	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部斜方 向の削り。
2	H-6	2 + 8	床面直上	土壌器	彫	19.4	—	4.4 普通	白色板・黑色板 白色板	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部削り。
3	H-6	3	4	土壌器	林	19.3	—	11.5 普通	褐色	相枕チャート 口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部削り。
4	H-6	8	3	須地器	蒸	(16.7)	—	(2.9) 蓬元	黒元	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部削り。
5	H-6	1 + 6 + 1 + 1 + 7 + 8 + 3 + 3	須地器	蒸	(16.6)	—	(1.8) 蓬元	黒元	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部削り。	
6	H-6	3	4	須地器	高台付	(18.7)	(13.6)	4.4 普通	灰色	口管部～脚部 輪轉形、体部下端～茎部 輪轉形、底面部削り。
7	H-6	3 + 彫	床面直上	土壌器	彫	(26.8)	—	(11.2) 普通	白色板	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部斜方 向の削り。
8	H-6	7 + 5 + 3 + 4 + 8	+下	土壌器	彫	24.2	—	(23.7) 普通	褐色	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部斜方 向の削り。
9	H-6	2	4	須地器	彫	—	—	蓬元	白色板	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部斜方 向の削り。
20 団	H-7	7	1	須地器	环	(12.6)	(6.5)	4.3 催化	灰色	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部斜方 向の削り。
2	H-7	3 + 4	1	須地器	环	(12.0)	(6.4)	4.5 催化	灰色	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部斜方 向の削り。
3	H-7	6	1	須地器	高台付	—	(7.0)	(2.4) 催化	黄色板	口管部～脚部 輪轉形構ナデ、脚部斜方 向の削り。
					輪					内面下に自然板。

種別No.番号							種類名							成・整形技術の特徴			備考		
	区	層	種	器種	口径	底径	高さ	①地先	②基盤	③施土	残存	外観	内面	口縁部～脚部	脚部地質	口縁部構ナデ、脚部地質	口縁部構ナデ、脚部地質		
20 [4]	4	H-7	8	1	須地器 小型壺	(16.9)	—	(6.0)	削化	板灰色	白色板	上位片 陶片	平行引き抜カタチ。	個人用の当て具所。	個人用の当て具所。	個人用の当て具所。	個人用の当て具所。		
5	H-7	D-1	—	上	須地器 壺	—	—	—	—	灰元	白色板	陶片	平行引き抜カタチ。	個人用の当て具所。	個人用の当て具所。	個人用の当て具所。	個人用の当て具所。		
7	D-5	—	上	須地器 壺	—	—	—	(12.8)	—	(10.0) 灰元	白色板	陶片	平行引き抜カタチ。	個人用の当て具所。	個人用の当て具所。	個人用の当て具所。	個人用の当て具所。		
8	遺構外 g' f' z'	D-1	V	須地器 壺	—	—	—	(8.9)	灰元	黄色板	白色板	陶片	平行引き抜カタチ。	個人用の当て具所。	個人用の当て具所。	個人用の当て具所。	個人用の当て具所。		
9	遺構外 g' f' z'	M-6	V	灰釉 瓶	—	(7.7)	(1.7)	灰元	稍灰黃色	白色板	底部片	輪縁整形、底部地質削り。	輪縁整形、底部地質削り。	輪縁整形、底部地質削り。	輪縁整形、底部地質削り。	輪縁整形、底部地質削り。	輪縁整形、底部地質削り。		
				陶器								高台付付輪縁ナデ。							

第7表 土器観察表(5)

種別No.番号							種類名							成・整形技術の特徴			備考		
	区	層	種	器種	形状	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)									
5 [8]	5	C-2	—	N	打撲石斧	—	(68.5)	54	28	(153.1)	下半部欠損。								
16 [6]	16	H-2	董	下	刀子かく	—	直角	(34)	9	2	(5.32)	破片。							
17 [6]	12	H-3	8	宋元直上	鍬	—	铁	(70)	(32)	2	(29.87)	一部欠損。							
19 [6]	10	H-6	1	4	砾石	—	安山岩	75	30	24	(33.78)	約1/2欠損。							
20 [6]	6	H-7	1	宋元竹下	砾津	楕形	铁	81	(63)	31	(233.91)	約1/2欠損。							
21 [6]	1	H-7	1	宋元竹下	鉈印	—	铁	286	57	印通9~14 柄4~9	(238.26)	印面右面部欠損。印面左面部欠損。印文「東」。							

第8表 石器・石製品・鉄製品観察表

VI 成果と問題点

1 奈良・平安時代の土器群の変遷について

本遺跡では、7軒の住居址が検出された。これらの住居址は、出土土器から、奈良・平安時代の帰属と考えられ、大きく2時期に分けられる。当該期の土器については、県内において編年基準が示されており(坂口・三浦 1986ほか)、市内の土器群はこれを基にした編年の位置付けが行われている。ここでは、出土土器をI～IIIの3段階に分け、土器群の様相について検討していきたい(第26図)。

I段階

H-5・6号住居址の2軒が該当する。出土した器種は、土師器坏・盤・鉢・甕、須恵器高台付坏・蓋が見られる。

土師器坏は、丸底から口縁部が短く内傾・内湾・直立して立ち上がる。口径10.5cm前後、13cm前後、20cm前後の3種類がある。盤は当該期に特徴的な、浅い体部から口縁部との境に弱い稜線を持って外反するものである。鉢は丸底から直立する口縁部に至る。甕は長胴で最大径を口縁部に持つ。胴部が直線的で口縁部が外反するタイプと、胴部上位にわずかな膨らみを持ち、口縁部が長く外行するタイプがある。前者は器肉がやや厚めで、縱方向の箇削りが施される。箇削りは頸部の屈曲にまで及ぶ。後者は斜方向の箇削りが施される。

須恵器高台付坏は、平底から体部が直線的に立ち上がる。高台は内端が接地し、断面が台形を呈する。底部は回転箇ケズリである。蓋は短い返りを持つタイプである。天井部は回転箇削りで、摘みは環状と推測される。天井部から丸みを持って口縁部に至るものと、水平気味の天井部から緩やかに湾曲するものがある。

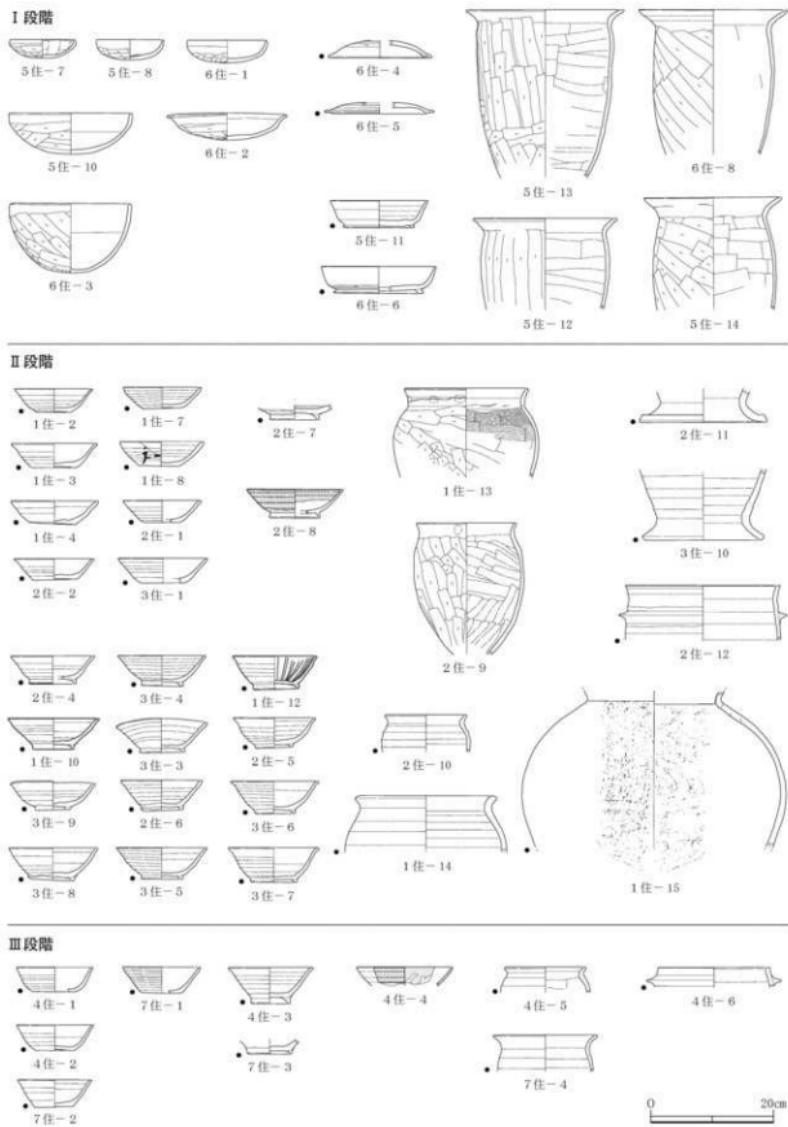
II段階

H-1・2・3号住居址の3軒が該当する。出土した器種は、土師器甕、須恵器坏・高台付碗・高台付皿・甕・瓶・羽釜、灰釉陶器碗が見られる。

土師器甕は器肉が厚くなる。口縁部に指頭痕が残り、胴部は縱・斜方向の箇削りが施される。口縁部が崩れた「コ」の字状を呈するものと、口縁部が短く外反するものがある。

須恵器坏は、浅い体部から口縁部がわずかに外反するタイプと、体部が直線的で轆轤痕の顕著なタイプがある。底部は回転糸切り未調整で、酸化焰焼成が主体を占める。高台付碗は、口縁部がわずかに外反するタイプ、体部が直線的で轆轤痕の顕著なタイプ、体部下位にわずかな丸みを持ち口縁部が外反するタイプがある。高台の断面形状は、三角形が台形である。台形の高台には貼り付けの粗雑なものが目立つ。底部は回転糸切り未調整で、酸化焰焼成が主体を占める。H-1号住居址12は内面に放射状暗文が施されている。高台付皿は器肉が厚く、高台は断面三角形である。底部は回転糸切り未調整で、焼成は酸化焰である。甕は轆轤整形と叩き整形が見られ、酸化焰焼成が主体となる。轆轤整形の甕は短い口縁が強く外反し、器肉が厚い。叩き整形の甕は丸底の大形である。瓶・羽釜は轆轤整形である。瓶は胴部下端を外側へ大きく曲げる。羽釜は口唇部がほぼ水平で、断面三角形の撓が水平に貼付される。焼成は酸化焰である。

灰釉陶器碗は、三日月高台の屈曲が緩やかになったもので、底部は回転箇削りである。釉薬は漬け掛けで、東濃窯編年の大原2号窯式期に相当すると考えられる。



第26図 奈良・平安時代の土器群

Ⅲ段階

H-4・7号住居址の2軒が該当する。出土した器種は、須恵器壺・高台付碗・甕・羽釜、灰釉陶器碗が見られる。

須恵器壺は、口縁部がわずかに外反するタイプと、体部が直線的で轆轤痕の顕著なタイプがある。口径は12cm前後である。底径に比して口径が小さくなるため、体部がII段階より立ち上がり気味になる。底部は回転糸切り未調整である。高台付碗は、口縁部がわずかに外反するタイプである。高台の断面形は三角形か台形である。底部は回転糸切り未調整である。甕は轆轤整形で口縁部が強く外反し、器肉は厚い。羽釜は轆轤整形で、口唇部がやや内傾し、断面三角形の鋸が水平に貼付される。須恵器は全て酸化焰焼成である。灰釉陶器碗は、釉薬漬け掛けで、体部から口縁部にかけて浅く開く。II段階同様、大原2号窯式期に相当すると考えられる。

以上、県内の土器編年研究を援用して3段階に区分したが、実年代については、およよそ、I段階が8世紀前半の前段階、II段階が10世紀前半の前段階、III段階が10世紀前半の後段階に比定できよう。

2 H-7号住居址出土の焼印について

焼印は、堅穴住居の北壁際で、床面よりやや浮いた位置から出土した。住居址は共伴した土器の年代観から、前述した土器分類のIII段階、10世紀前半の後段階と考えられる。焼印の材質は鉄製で、全長は286mm、印面の向かって右下が欠失している。印面の大きさは縦75mm(二寸五分)、横57mm(一寸九分)、厚さは9~14mmである。印文は「東」と判読できる。印面は複数本の扁平な鉄板で構成され、それらを印面より約151mmの所で合体させて一本の柄としている。柄は徐々に細くなり、先端では6mm×4mmの断面方形を呈する。柄の末端は尖銳で、木質の柄部が装着されていたと見られる。

古代の焼印は関東甲信越地方からの出土に限られており、群馬県が最も多い。出土遺跡の性格は一般的な集落遺跡の範疇に入るものが多く、ほとんどが堅穴住居址からの出土である。これは本遺跡も同様であろう。焼印の用途については、牛馬等に押す畜産印と、木器などの木製品に押す印が考えられている。実物からの用途特定は困難だが、近接地を通過していたと推定される東山道駿路の存在から、畜産印の可能性が示唆される。牛馬に押す場合、その目的は所有・所属先の表示、他との区別と言えよう。文字の意味するところについては、焼印が出土した遺跡で印文と同一の文字、もしくは密接な関連を有する文字を記した墨書き土器が共伴する場合が多いことから、集落内におけるある種の集団を象徴する文字のひとつとも推測されている(高島2001)。但し、本遺跡ではII段階に該当する住居址から2点の墨書き土器が確認されたものの、文字は「秋」^{※1}と判読不明とで、「東」との関連性は見出せなかった。

※1 高島英之氏のご教説による。

参考文献

- 安中市教育委員会 1991『地元遺跡・地元古道跡』
安中市教育委員会 1999『駒谷丁古道跡』
安中市教育委員会 1999『南・下原古道跡』
安中市教育委員会 2007『清水木造橋・清水V道跡・清水VI道跡』
安中市史刊行委員会 2001『安中市史』第4巻 源始古代中世資料編
安中市史刊行委員会 2003『安中市史』第1巻 史通編
安中市史刊行委員会 2005『西裏郷史』
安中市埋蔵文化財発掘調査班 2005『下原・寺井遺跡』
安中市埋蔵文化財発掘調査班 2005『植松・地尻遺跡』
安中市埋蔵文化財発掘調査班 2006『織田・寺井遺跡』
安中市埋蔵文化財発掘調査班 2009『土井遺跡』
財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984『小尾(遺物類)』
財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989『佐武良造跡・荒砥古道跡』
坂口 一・三浦京子 1996『奈良・平安時代の土器編年』『群馬県史研究』24
群馬県史編纂小委員会
高島英之 1999『古代の焼印についての収集』『古代史研究』第11号
立教大学古代史研究会
高島英之 2001『群馬県藤名町高須広神道跡出土の平安時代焼印について』『青山考古』第1号 青山考古学会
田中広明 2002古代の地域開拓と牛馬の管理『秋と考古学—馬をめぐる諸問題—』
資料館 山梨県考古学協会
中沢 信 1997『矢田道跡両面における古墳時代後期から平安時代の土器について』『矢田道跡Ⅵ』財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
伏見沖歌 1977『伏見沖歌編』角川書店子真・奥川書店
妙義山道跡調査会 1990『古立東山道跡・古立中村道路・八木連津澤古道跡・八木連
荒砥古道跡』

写 真 図 版

図版 1



東山道駅路関係学術調査時における並木遺跡周辺（上が東）

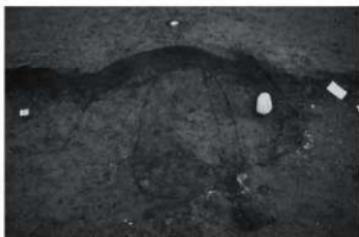


並木遺跡 全景（上が南西）

図版 2



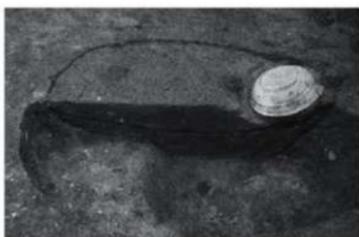
H-1号住居址



H-1号住居址 窯



H-1号住居址 窯遺物出土状態



H-1号住居址 貯藏穴遺物出土状態



H-2号住居址



H-2号住居址 遺物出土状態近景



H-2号住居址 窯



H-2号住居址 窯遺物出土状態



H-3号住居址



H-3号住居址 遗物出土状态近景



H-3号住居址 瓮



H-3号住居址 瓮遗物出土状态



H-3号住居址 瓮袖内遗物出土状态



H-4号住居址



H-5号住居址



H-5号住居址 遗物出土状态近景

図版 4



H-5号住居址 窯



H-5号住居址 窯断ち割り



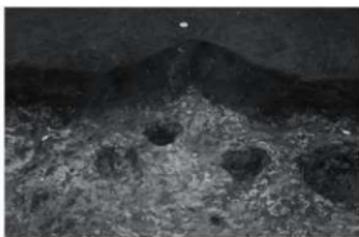
H-6号住居址



H-6号住居址 遺物出土状態近景



H-6号住居址 窯



H-6号住居址 窯掘り方



H-6号住居址 掘り方



H-6号住居址 D-3断面



H-7号住居址



H-7号住居址 焼印出土状態



H-7号住居址 掘り方



D-1号土坑



D-2号土坑



D-3号土坑



D-4号土坑



D-5号土坑

図版 6



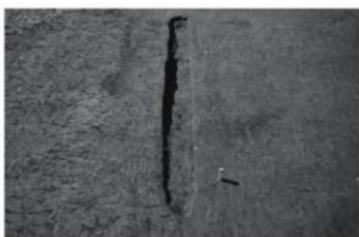
P-1～47号ビット



P-1～47号ビット



M-1号溝



M-2号溝



M-3号溝



M-4号溝 断面



M-5号溝



M-6号溝



M-7号沟



M-8号沟



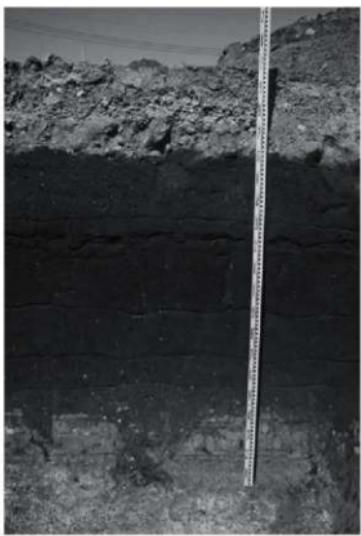
M-9 + 10号沟



M-12号沟



M-11号沟

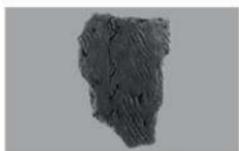


基本层序

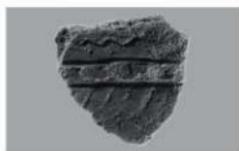
図版8



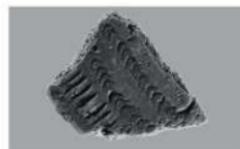
绳文土器 (1)



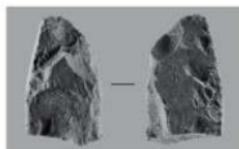
绳文土器 (2)



绳文土器 (3)



绳文土器 (4)



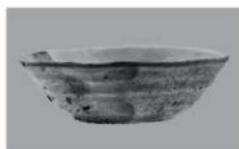
打製石斧 (5)



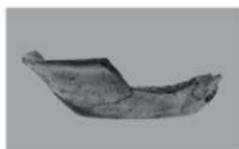
H-1号住居址 编物石



H-1号住居址 坏 (1)



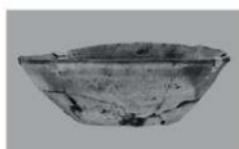
H-1号住居址 坏 (2)



H-1号住居址 坏 (3)



H-1号住居址 坏 (4)



H-1号住居址 坏 (5)



H-1号住居址 坏 (6)



H-1号住居址 坏 (7)



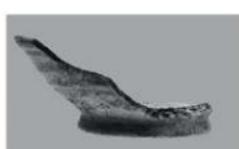
H-1号住居址 坏 (8)



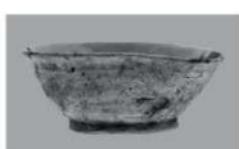
H-1号住居址 高台碗 (9)



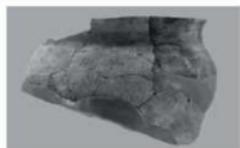
H-1号住居址 高台碗 (10)



H-1号住居址 高台碗 (11)



H-1号住居址 高台碗 (12)



H-1号住居址 瓢 (13)



H-1号住居址 瓢 (15)



H-2号住居址 坩 (1)



H-2号住居址 坩 (2)



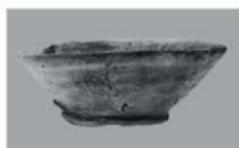
H-2号住居址 高台碗 (3)



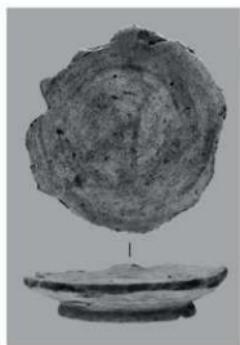
H-2号住居址 高台碗 (4)



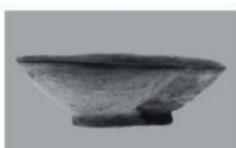
H-2号住居址 高台碗 (5)



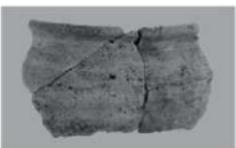
H-2号住居址 高台碗 (6)



H-2号住居址 高台皿 (7)



H-2号住居址 碗 (8)

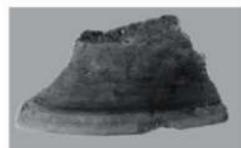


H-2号住居址 瓢 (10)

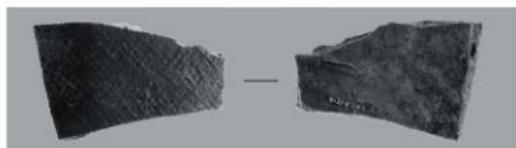


H-2号住居址 瓢 (9)

図版 10



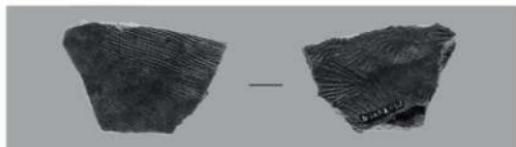
H-2号住居跡 壺 (11)



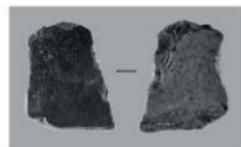
H-2号住居跡 壺 (13)



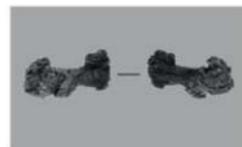
H-2号住居址 羽釜 (12)



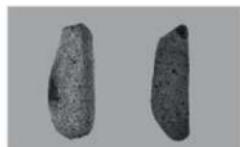
H-2号住居址 壺 (14)



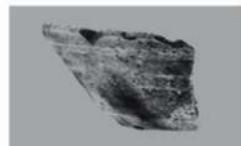
H-2号住居址 壺 (15)



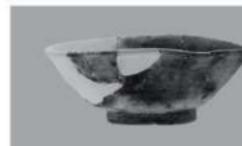
H-2号住居址 鉄製品 (16)



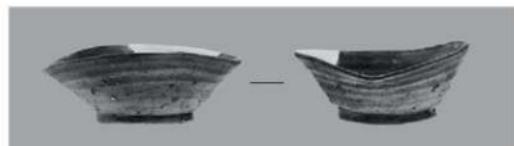
H-2号住居址 編物石



H-3号住居址 壺 (1)



H-3号住居址 高台碗 (2)



H-3号住居址 高台碗 (3)



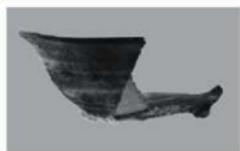
H-3号住居址 高台碗 (5)



H-3号住居址 高台碗 (4)



H-3号住居址 高台碗 (6)



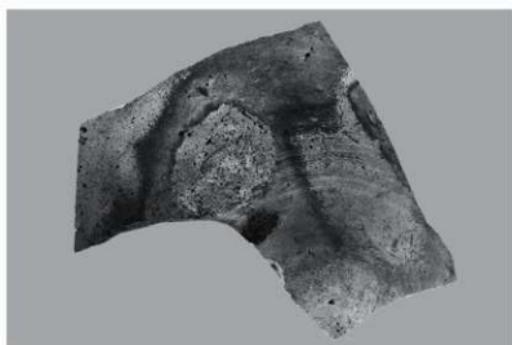
H-3号住居址 高台碗 (7)



H-3号住居址 高台碗 (8)



H-3号住居址 壺 (10)



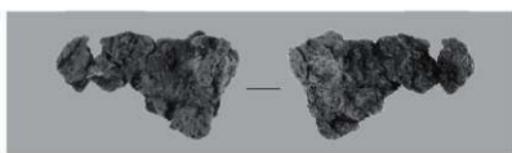
H-3号住居址 壺 (11)



H-4号住居址 坏 (1)



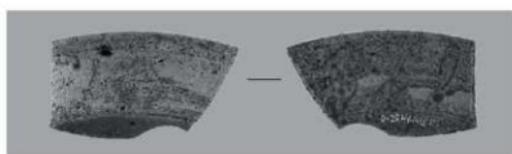
H-4号住居址 坏 (2)



H-3号住居址 鉄製品 (12)



H-4号住居址 高台碗 (3)

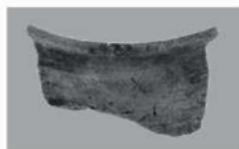


H-4号住居址 碗 (4)

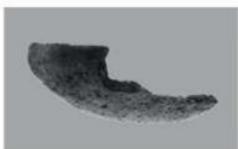


H-4号住居址 羽釜 (6)

図版 12



H-4号住居址 壺 (5)



H-5号住居址 壺 (7)



H-5号住居址 壺 (8)



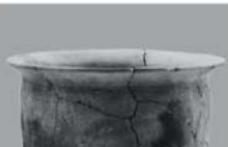
H-5号住居址 壺 (9)



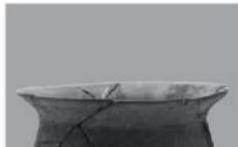
H-5号住居址 壺 (10)



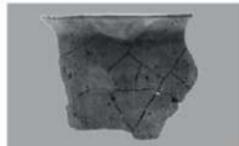
H-5号住居址 高台壺 (11)



H-5号住居址 壺 (12)



H-5号住居址 壺 (13)



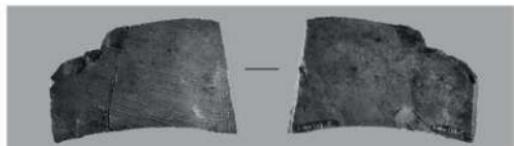
H-5号住居址 壺 (14)



H-5号住居址 壺 (15)



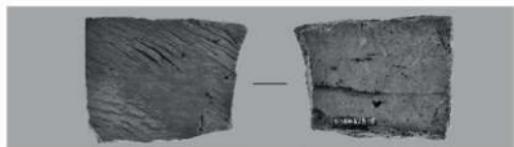
H-5号住居址 壺 (16)



H-5号住居址 壺 (15)



H-5号住居址 壺 (16)



H-5号住居址 壺 (15)



H-5号住居址 壺 (16)



H-5号住居址 壺 (15)



H-5号住居址 壺 (16)

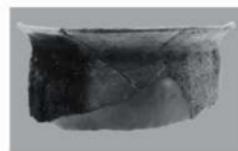
図版 13



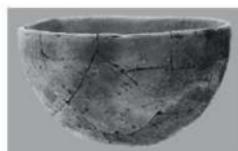
H-6号住居址 坯 (1)



H-6号住居址 盤 (2)



H-6号住居址 壺 (7)



H-6号住居址 鉢 (3)



H-6号住居址 高台坯 (6)



H-6号住居址 壺 (8)



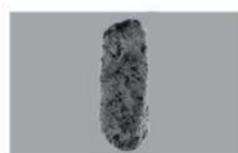
H-6号住居址 蓋 (4)



H-6号住居址 蓋 (5)



H-6号住居址 壺 (9)



H-6号住居址 砥石 (10)



H-6号住居址 線物石

図版 14



H-7号住居址 坏 (1)



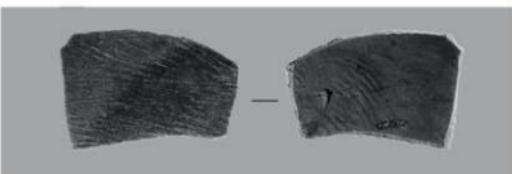
H-7号住居址 坏 (2)



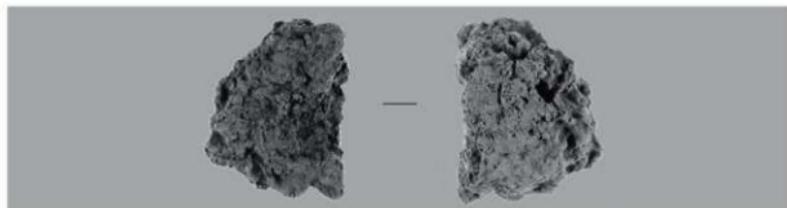
H-7号住居址 高台碗 (3)



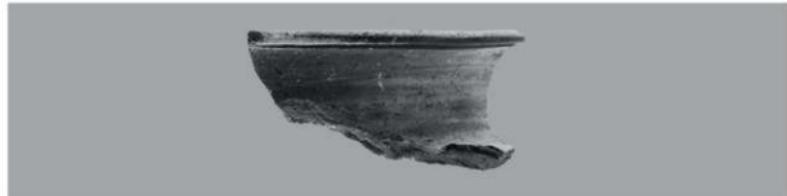
H-7号住居址 壺 (4)



H-7号住居址 壺 (5)



H-7号住居址 榄形鉄滓 (6)



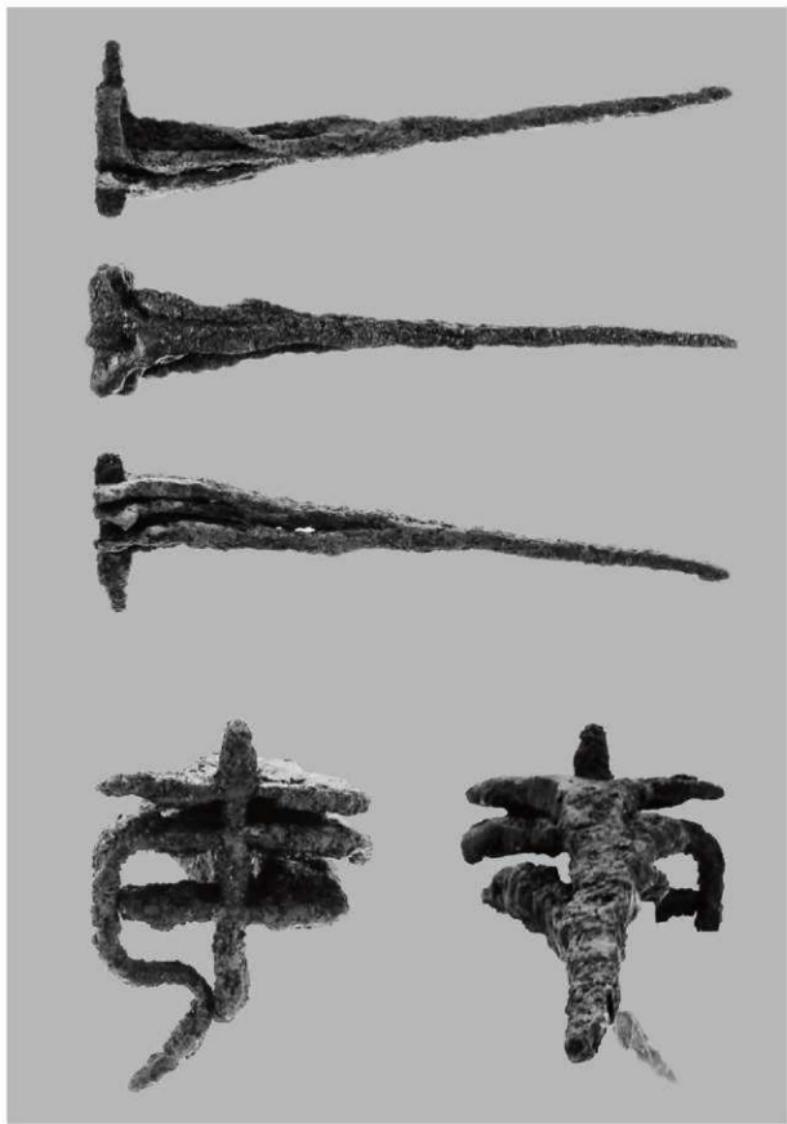
D-5号土坑 壺 (7)



遺構外 壺 (8)

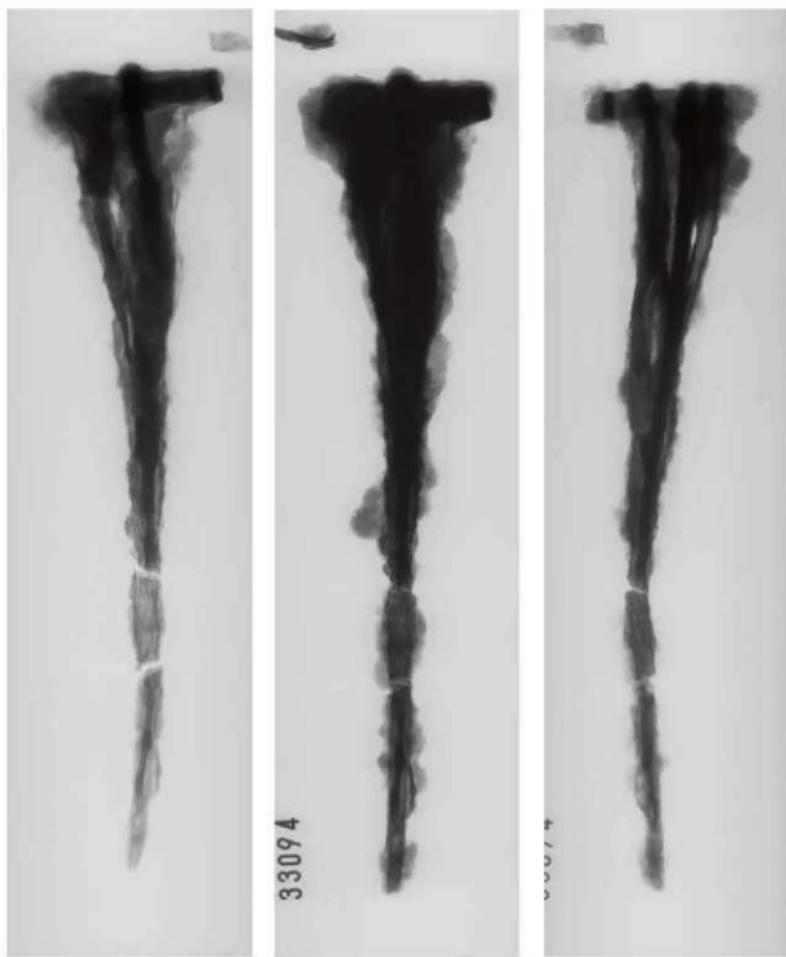


遺構外 碗 (9)



H-7号住居址 焼印 (1)

図版 16



焼印X線写真

発掘調査報告書 抄録

ふりがな	なみきいせき
書名	並木遺跡
副書名	安中市消防署庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ番号	
編著者名	千田茂雄・有山怪世
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-0292 群馬県安中市松井田町新堀 245 TEL027-382-1111
発行年	西暦 2010 年(平成 22 年)3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
並木遺跡	安中市安中一丁目字 並木地内	102113	D-24	36° 19' 26"	138° 53' 03"	20081003 ～ 20081202	約 862 m ²	安中市消防 署庁舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
並木遺跡	集落	縄文時代 奈良・平安時代 近世	－ 住居址 7 溝 1 土坑 5、ピット 8 溝 12 ピット 52	縄文土器・石器 土師器・須恵器・灰釉陶器・ 鐵製品・鐵滓・砾石・編物 石	奈良・平安時代の集落址。 平安時代の H-7 号住居址から 印文「東」の焼印と楕形鉄滓、 H-1 号住居址から「秋」と墨 書きされた須恵器が出土。

並木遺跡

—安中市消防署庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 平成 22 年 3 月 31 日
 編集・発行 安中市教育委員会
 群馬県安中市松井田町新堀 245
 印刷 朝日印刷工業株式会社
 群馬県前橋市元絶社町 67 番地